



福岡市埋蔵文化財調査報告書第1474集

# 那珂 87

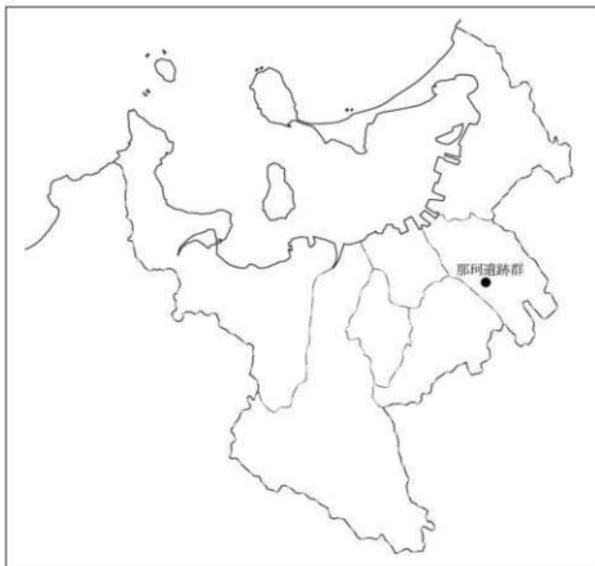
—那珂遺跡群第182次調査報告—





# 那 珂 87

—那珂遺跡群第 182 次調査報告—



遺跡略号 - NAK182

調査番号 - 2006

2023

福岡市教育委員会



## 卷頭図版



SK008・011 出土軒瓦集合



SE031 出土遺物集合



## 序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展した歴史をもち、地中にはそれを物語る多くの埋蔵文化財が存在しています。本市ではこれら文化財の保護に努めているところではありますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に関しては、事前に発掘調査を実施して記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は共同住宅建設に伴い、博多区竹下四丁目・那珂一丁目地内で実施した那珂遺跡群の第182次調査の報告です。今回の調査では、日本最古級に位置づけられている古代の瓦が多数に出土しました。瓦にはこれまでに例のないものも多く見つかっており、今後の瓦研究に大きく寄与するものと考えられます。また、弥生時代の青銅器や、平安時代に中国からもたらされた陶磁器等も出土しています。このことは本調査地点周辺の重要性を示すとともに、遺跡全体像の解明にもつながる貴重な成果です。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって多大なご理解とご協力をいただきました株式会社クレ・コーポレーション様をはじめとした関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会  
教育長 石橋 正信

## 例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が令和2年4月20日から9月29日まで博多区竹下四丁目、那珂一丁目で実施した那珂遺跡群第182次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構は、井戸をSE、溝をSD、竪穴住居をSC、土坑をSK、不明遺構をSXとそれぞれ記号化し、001から通して番号を付した。ピットは、SPと記号化し、0001から通し番号を付した。
3. 本書で使用した方位は、すべて国土座標北（世界測地系）である。
4. 本書に掲載した遺構実測、遺構写真撮影は中尾祐太による。
5. 本書に掲載した遺物実測は、熊笹御堂和香子、井上加代子、三浦悠葵、中尾による。
6. 遺物写真撮影、製図、執筆、編集は中尾による。
7. 本書に係る記録と遺物は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに收藏し、管理・活用する。

調査番号	2006	遺跡略号	NAK-182
調査地	福岡市博多区竹下四丁目108番、110番、99番の一部 那珂一丁目700番	分布地図図幅名	37
申請地面積	5,362.61㎡	開発面積	2,600㎡
調査実施面積	1,410㎡	事前審査番号	2019-2-717
調査期間	令和2年4月20日～令和2年9月30日		

## 本文目次

I	はじめに	1
1.	調査にいたる経緯	1
2.	調査の組織	1
3.	遺跡の立地と歴史的環境	2
II	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	遺構と遺物	8
1)	古墳時代後期～古代の遺構と遺物	8
	井戸	8
	溝	15
	掘立柱建物	21
	土坑	24
2)	弥生時代中期～古墳時代前期の遺構と遺物	43
	井戸	43
	溝	47
	竪穴住居	48
	土坑	57
	ピット	58
3)	その他の遺構と遺物	58
III	小結	62

## 挿入写真目次

Ph1	SE006 検出状況 (東から)	21
Ph2	SK008 遺物出土状況 (東から)	24
Ph3	SK011 上層遺物出土状況 (南東から)	36
Ph4	Ph4 SK024 出土銅鐸	57

## 図版目次

巻頭図版	SK008・011 出土軒丸瓦集合 SE031 出土遺物集合	
PL1	調査第1区全景 (北から) 調査第2区全景 (北西から) 調査第3区北側全景 (西から) 調査第3区南側全景 (北西から) SE002 土層 (南から) SE031 遺物出土状況 (南から)	
PL2	SD003 遺物出土状況 (北から) SD016 遺物出土状況 (南西から) SC019・020 完掘状況 (西から) SC033 (北東から) SC037・038 完掘状況 (南西から) SC044 遺物出土状況 (北から)	

## 付図

那珂遺跡群第182次調査遺構配置図 (1/100)

## 挿図目次

Fig1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig2	珂遺跡群調査地点一覽 (1/10,000)	4
Fig3	182次調査地点周辺の調査地点 (1/2,000)	5
Fig4	182次調査地点周辺の調査地点 (1/1,000)	6
Fig5	基本層序	7
Fig6	SE002 実測図 (1/40)	8
Fig7	SE002 出土遺物実測図1 (1/3)	9
Fig8	SE002 出土遺物実測図2 (1/3)	10
Fig9	SE002 出土遺物実測図3 (1/3)	11
Fig10	SE002 出土遺物実測図4 (1/3)	12
Fig11	SE002 出土遺物実測図5 (1/3)	13
Fig12	SE002 出土遺物実測図5 (1/4・1/6・1/3)	14
Fig13	SD003・004 実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3・1/6)	15
Fig14	SD009・010・018 実測図 (1/40) 及びSD009 出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig15	SD016 実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図1 (1/3)	18
Fig16	SD016 出土遺物実測図2 (1/3・1/6)	19
Fig17	SD032・042 実測図 (1/60・1/40)	20
Fig18	SB006 実測図 (1/60)	22
Fig19	SB006 出土遺物実測図 (1/3・1/6)	23
Fig20	SK008 実測図 (1/40)	24
Fig21	SK008 出土遺物実測図1 (1/4)	25
Fig22	SK008 出土遺物実測図2 (1/4)	26
Fig23	SK008 出土遺物実測図3 (1/4・1/6)	27
Fig24	SK008 出土遺物実測図4 (1/6)	28
Fig25	SK008 出土遺物実測図5 (1/6)	29
Fig26	SK008 出土遺物実測図6 (1/6)	30
Fig27	SK008 出土遺物実測図7 (1/6)	31
Fig28	SK008 出土遺物実測図8 (1/6)	32
Fig29	SK008 出土遺物実測図9 (1/6)	33
Fig30	SK008 出土遺物実測図10 (1/6)	34
Fig31	SK008 出土遺物実測図11 (1/3・1/6)	35
Fig32	SK011 実測図 (1/40)	36
Fig33	SK011 出土遺物実測図1 (1/4)	37
Fig34	SK011 出土遺物実測図2 (1/4)	38
Fig35	SK011 出土遺物実測図3 (1/6)	39
Fig36	SK011 出土遺物実測図4 (1/6・1/3・1/1)	40
Fig37	SK017 実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3・1/6)	41
Fig38	SK030・SX064 実測図 (1/40・1/20) 及び出土遺物実測図 (1/3・1/6)	42
Fig39	SE031 実測図 (1/40)	43
Fig40	SE031 出土遺物実測図1 (1/3)	44
Fig41	SE031 出土遺物実測図2 (1/3・1/4)	45
Fig42	SE031 出土遺物実測図3 (1/3)	46
Fig43	SD047・055 実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	47
Fig44	SC001・007・012・015・022 実測図 (1/60) 及びSC007 出土遺物実測図 (1/3)	48
Fig45	SC019・020 実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/3・1/1)	50
Fig46	SC028・033・037・038・044 実測図 (1/60) 及びSC033 出土遺物実測図 (1/3)	52
Fig47	SC044 出土遺物実測図 (1/3)	53
Fig48	SC045・046・048・051・054 実測図 (1/60)	54
Fig49	SC0048・051・052・054 出土遺物実測図 (1/3)	55
Fig50	SK005・023・024・025 実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	56
Fig51	SK024 出土銅鐸実測図 (1/3)	57
Fig52	SP0058 実測図 (1/20) 及び SP0058・0106 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	58
Fig53	その他の遺構実測図1 (1/80)	59
Fig54	その他の遺構実測図2 (1/80・1/60)	60
Fig55	その他の遺物実測図 (1/4・1/3)	61

# I はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区竹下四丁目、那珂一丁目地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和元年10月1日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていること、確認調査が実施され、現地表面下30cmで埋蔵文化財が確認されたことから、遺構の保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和2年4月10日付で株式会社クレ・コーポレーションを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月20日から発掘調査を、令和3・4年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

## 2. 調査の組織

調査委託：株式会社クレ・コーポレーション

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：令和2年度・資料整理：令和3・4年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波 正人

調査庶務：文化財活用課

課長 松本 真人（R2・3年度）

一ノ瀬明子（R4年度）

同課管理調整係長 大森 秋子（R2・3年度）

石川あゆ子（R3・4年度）

同係 松原加奈枝（R2年度）

井手 瑞江（R3年度）

内藤 愛（R3・4年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係

係長 本田浩二郎（R2年度）

田上勇一郎（R3・4年度）

同課主任文化財主事 田上勇一郎（R2年度）

森本 幹彦（R3・4年度）

同係文化財主事 山本 晃平（R2・3年度）

三浦 悠葵（R4年度）

調査担当：埋蔵文化財課調査第2係

文化財主事 中尾 祐太

（現：史跡整備活用課福岡城跡整備係）

整理作業：花田友美子、富永静子、竈坂弥佳

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は北側を博多湾に限られ、東側を三郡山地からのびる丘陵性山地、南西を脊振山地、および脊振山地から派生した丘陵によって画された低地の小平野である。平野内には宝満山に発し北流する御笠川、脊振山系に発し北流する那珂川がそれぞれ博多湾に注ぎ込んでおり、両河川およびこれらから派生する中小河川の開析作用によって形成された台地が島状に断続的に連なる。一帯は花崗岩風化土層を基盤としており、その上に堆積した通称鳥栖ローム層および八女粘土層と呼称される Aso-4 火砕流堆積物から成る。那珂遺跡群はこれら丘陵群のうち最も北に位置する。遺跡北端には東西方向の浅い鞍部があり、これより北には比恵遺跡群が展開する。両者は「周知の埋蔵文化財包蔵地」として区別されてはいるものの、遺構の展開その他に有機的な関係が認められ、実質一連の遺跡群と考えられている。また、両遺跡群および周辺遺跡は「奴国」の一部を構成する弥生時代～古墳時代前期の拠点集落として知られ、多種多様な遺構、遺物が検出されている。

那珂遺跡群は旧石器時代から中世の複合遺跡であるが、継続した集落の端緒となるのは刻目突帯文土器を基準とする弥生時代早期で、同前期にかけて遺構が増加する。遺構のまとまりは、遺跡の北西部、南東部の低位面と南西部の段丘縁辺部の3カ所に認められる。このうち本調査地点の南約600mに位置する37次調査地点(遺跡南西部)からは当該機の二重環濠が確認されている。環濠の平面形は、残存部からほぼ正円形に復元することができ、企画性の高さをうかがうことができる。

弥生時代中期後半以降になると遺構の検出範囲は遺跡全城へと拡大する。住居や井戸は同位置、もしくは近い位置で長期間営まれた結果、発掘調査時にはこれら遺構の覆土が包含層上に検出されることも少なくない。当該期の比恵・那珂遺跡群からは大小の溝が検出されるが、この中には街区として機能していたものもあり、計画的な集落景観を呈していたと推察される。また、両遺跡からは外来系土器や舶来品と考えられる鉄器が多く出土しており、一大交易拠点であったと考えられている。この他、遺跡群からは、青銅器の鋳型が複数確認されていることから、春日市須玖遺跡群とともに、青銅器の生産を行っていたことが分かる。本調査地点からは、青銅製の鋤先と小銅鐸が出土している。

弥生時代終末期になると道路が造営される。道路は両側側溝を有し、比恵遺跡群北西から那珂遺跡群中央まで1.5km以上の規模をもつ。道路終点付近で九州最古級の前方後円墳である那珂八幡古墳が造営される。この大集落は前期前半までは保持されるものの、前期後半以降、遺構の検出は極めて散漫になる。

その後再び遺構が増加するのは古墳時代後期である。6世紀第2四半期に三重の周濠を巡らす東光寺剣塚古墳が築造され、この時期を前後として集落が各所で再び営まれる。比恵遺跡群の北西部では多重柵列と大型掘立柱建物などが数カ所で確認されており、規模・構造などから日本書紀にみられる「那津官家」に関わる官衙関連遺構として認識されている。以降の官衙関連遺構は、那珂遺跡群に収斂されるようで、7世紀以降の方形区画や倉庫群と考えられる総柱建物、及び長舎建物がまとめて検出されている。周辺からは、大野城市牛頭塚系の神ノ前系系、月ノ浦系軒丸瓦を含むいわゆる「初期瓦」が多数出土している。特に軒丸瓦は生産地を除くと、その出土地は那珂遺跡群の一部に限られており、かねてより、背景や施設の性格が注目されていた。本調査地点からは、これらの瓦が多量に廃棄された土坑を検出しており、上記の2つのタイプを含む多くの軒丸瓦が出土している。施文方法は多種多様で、中には瓦陶兼業窯ならではの特徴をもつものもある。

中世については散発的に遺構・遺物が確認されており、村落が広がっていたことは明らかではあるが、詳細については未だ不鮮明である。

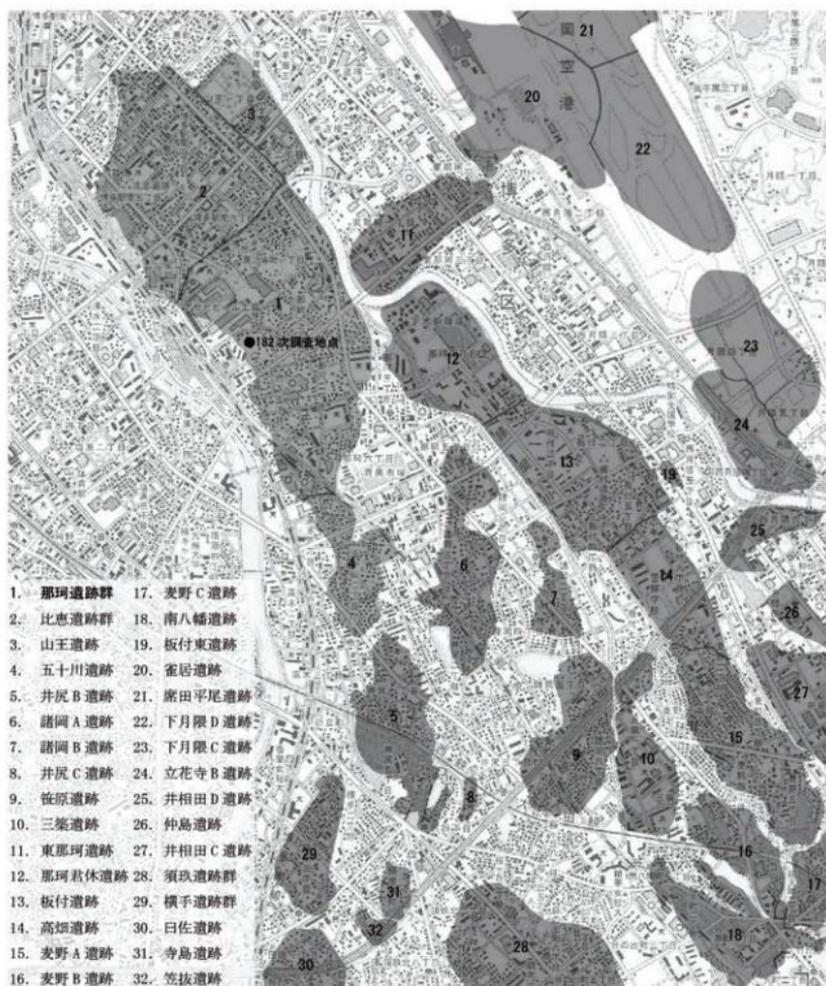


Fig1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig2 那珂遺跡群調査地点一覧 (1/10,000)



Fig3. 182次調査地点周辺の調査地点 (1/2,000)



Fig4 182次調査地点周辺の調査地点 (1/1,000)

## II 調査の記録

### 1. 調査の概要

182次調査地点は遺跡中央の西端部の台地縁辺部に立地する。調査区西側の現代の水路を境として、以西は包蔵地外となっており、確認調査の結果、河川堆積が広がるものと考えられる。

本調査は敷地面積 5362.61 m<sup>2</sup>のうち共同住宅建設工事によって埋蔵文化財に影響があると考えられる範囲で実施した。調査面積は 1525 m<sup>2</sup>である。

層序は基本的に表土直下で遺構検出面の鳥栖ローム層となる。Fig5の基本層序(柱状図)に示す通り、対象地が台地縁辺となることから、東側では標高 8.5～9 m前後で遺構面となるが、西側においては 6 m～6.5 mで鳥栖ローム下部～八女粘土が検出される。西側は遺構検出面直上まで攪乱土を含む表土が堆積していることから、このレベル差は近年の造成等に起因するものと考えられるが、調査区西側でも一定の深さを有する遺構が残存しており、本来の地形に拠るところも大きいと考えられる。東側の高所の一部には二次堆積と考えられる黒褐色土、灰黄褐色土が堆積する。

調査は、4月20日より行った事前準備の後、5月7日の重機による表土掘削をもって開始した。調査に伴う残土置き関係上、調査は全体を三分割して実施したため、まず調査区東側の3割強を調査第1区として設定した。1区では古代の井戸、掘立柱建物、初期瓦の一括廃棄土坑を検出した。適宜記録を行い、8月19日に1区の調査を終了。翌8月20日に重機による残土の移動を行いつつ、同日より、西側に設定した2区の調査にとりかかった。2区は全体的に削平されていたものの、古代の溝と弥生時代の井戸を検出している。なお、1区の調査時は雨天が続いていたこともあり、工程に遅れが生じていたため、2区の調査開始と前後して、3区の重機による掘削を行い、第2区の調査と第3区の調査は一部平行して行った。3区は調査区の北側部分に相当し、弥生時代終末期～古墳時代前期と考えられる堅穴住居を複数棟検出した。また、出土遺物についても、調査区西側では各遺構で初期瓦の出土が目立っていたが、北側では弥生時代中期～古墳時代前期の土器が大部分を占めており、時期による場の利用の違いを認めることができる。第3区の調査は9月29日に終了し、翌30日にかけて機材の撤収や残務処理を行い、調査にかかる行程を終了した。



Fig5 基本層序

## 2. 遺構と遺物

本調査地点で検出された遺構と遺物を見ると、那珂遺跡群全体の集落動態同様、弥生中期～古墳時代前期と古墳時代後期～古代の二時期に大別することができる。以下、この時期区分ごとに報告する。

### 1) 古墳時代後期～古代の遺構と遺物

#### 井戸

本時期に属する井戸は1基検出した。

#### SE002 (Fig6)

調査区南側中央部に検出した。遺構のほぼ中央を埋設管による東西方向の溝状の攪乱に切られる。攪乱土除去時に古代の遺物を確認したことから、井戸枠が残る可能性を考え、半裁の上、土層確認しながらの掘削を試みたが、梅雨時期で雨天が続いたこと、上記の溝状の攪乱が水みちとなったことにより、本遺構へ多量の水が流れ込むこととなり、最終的に土層観察面が崩落してしまい、井戸枠の痕跡は確認することができなかった。また、この時点で250 cm程度掘削していたが、壁面が非常に脆くなっていたため、以後の人力での掘削は危険と判断し、落ちた土の搬出及び最下層の掘削は重機によって行った。

多量の土師器をはじめとして多くの遺物が出土した。特筆すべき遺物に風字硯や邢窯系白磁碗がある。以下の出土遺物から9世紀前後に機能した井戸か。

#### 出土遺物 (Fig7～12)

1は邢窯系白磁碗である。口縁部の一部を欠失する。小さな玉縁口縁と蛇の目高台をもつ。胎土は純白で極めて精良。軸はやや薄く、均一にかかり色調は乳白色を呈する。2・3は越州窯系青磁である。2は碗で、低い蛇の目高台を有し、内外面に目跡が残る。3は水注の把手部分である。4～9は須恵器である。4は甕である。外面はタタ

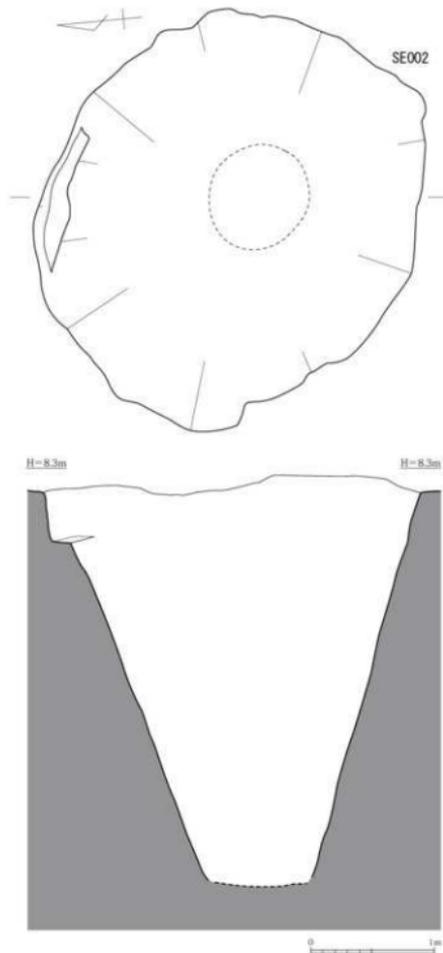


Fig6 SE002 実測図 (1/40)

キ成形、内面には平行の当て具痕が残る。5は坏蓋。天井部のヘラケズリは省略され、口縁端部は丸く取め、わずかに沈線を有する。6・7は坏身。いずれも高台は低く、7は体部と高台の境が不鮮明である。8・9は瓶である。いずれも高台をもたない。8は小型で、肩は張らず徳利形を呈する。体部下に「大」字状の線刻を施す。9は肩が張り、口縁部は上方で外側に開く。10～60は土師器である。10～14は甕である。いずれも外面ハケ目、内面ケズリ仕上げである。10・11は口縁部が薄く頸部でやや鋭く屈曲し口縁へとつながる。12～14は口縁がやや厚く体部との境は緩やかである。12は体部の各所に線刻状の筋が残る。15・16は甕である。17は小型の甕で、把手が付く。器高は低く、後世の鍋状の器形を呈する。18は小型の甕である。19は鉢。胴下半は緩く内湾しながら立ち上がり、口縁付近で窄まる。胴下半にはケズリの痕跡が残る。20は器種不明土器の底部片である。底部は厚く、外面には圧痕のような痕跡が残る。21～42は坏である。31は口縁端部付近数か所に煤が付着しており、灯明皿のような使用方法が考えられる。41は底部に線刻を有する。42は底部のほぼ中央を穿孔する。43は碗である。全体的に丸みを帯びた器形をもつ。調整は不明瞭。44～50は高台付坏である。

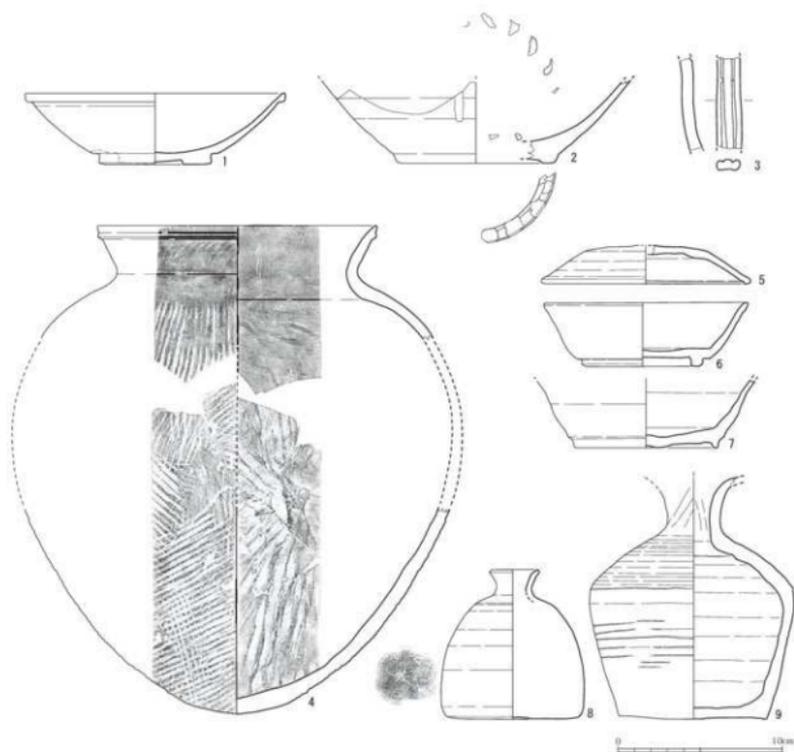


Fig7 SE002 出土遺物実測図Ⅰ (1/3)

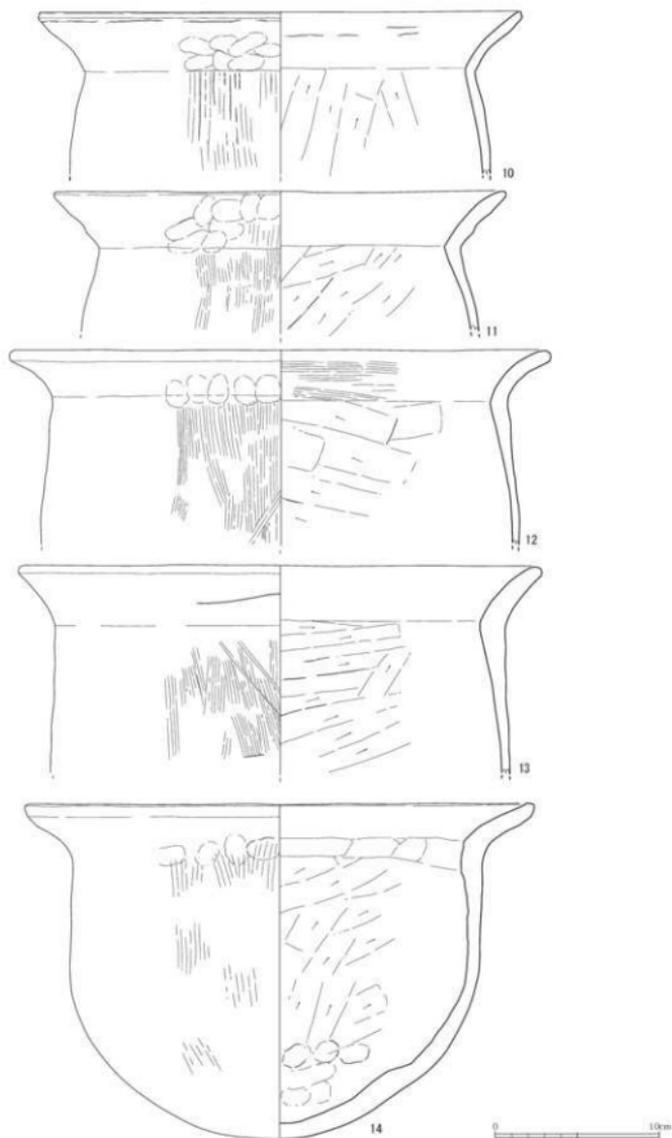


Fig8 SE002 出土遺物実測図2 (1/3)

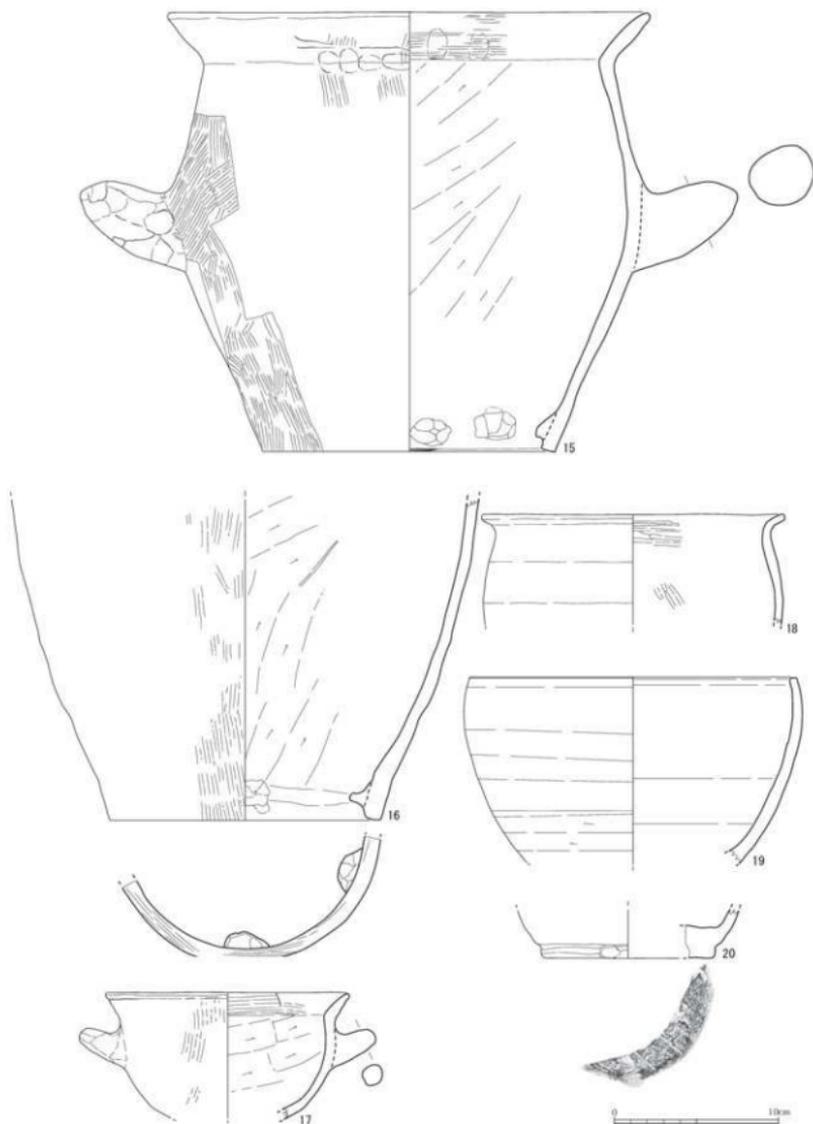


Fig9 SE002 出土遺物実測図3 (1/3)

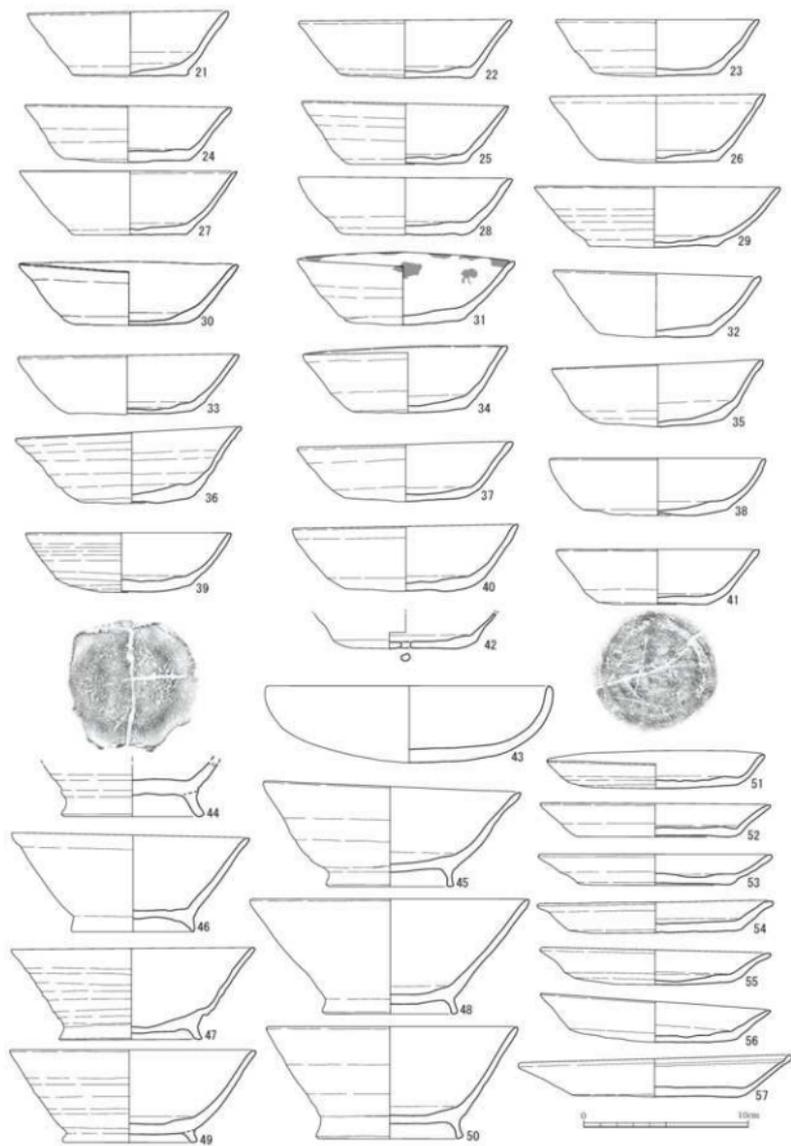


Fig10 SE002 出土遺物実測図4 (1/3)

44は内底面に線刻される。51～57は皿である。58は耳皿である。59は高台付皿である。高台はやや高い。60は口縁内側に煤が付着する煮炊き具である。鍋というべきか。器壁は厚く、浅い体部をもち、口縁で外側に緩く外反する。61～64は黒色土器で、いずれもA類である。65・66は移動式竈。65は底部分の破片、66は底部片である。67は風字硯である。脚部は1カ所残存するが、先端を欠損する。裏面にはハケ状の調整が施される。墨堂部分は使用によるものか摩滅している。68～71は瓦である。68・69は軒丸瓦で、いわゆる「初期瓦」と呼称されているものである。その他の初期瓦同様2点ともに蓮華文の表現は稚拙である。68は当て具状の工具を用いて施文されたものか。丸瓦の凹部には布目が残る。69は瓦当に板状工具を強く押圧した後に短く引く工程を外縁に沿って連続的に行うことで蓮弁文を表現する。また、瓦当裏面にもハケ目の痕跡が残る。70は有段式の丸瓦。外面縄タタキ成形の後ナデ、内面には布目が残る。71は平瓦である。外面平行タタキの後、板ナデを施すが、端部にはタタキ痕跡が残る。内面には布目が残る。72は砂岩製の砥石か。73～75は鉄製の鎌である。

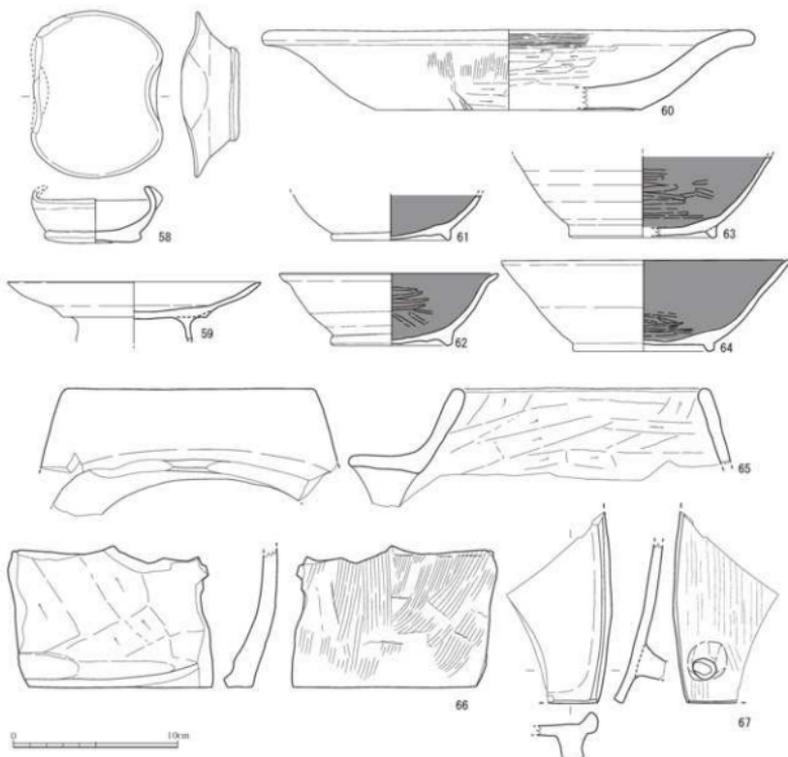


Fig11 SE002 出土遺物実測図5 (1/3)

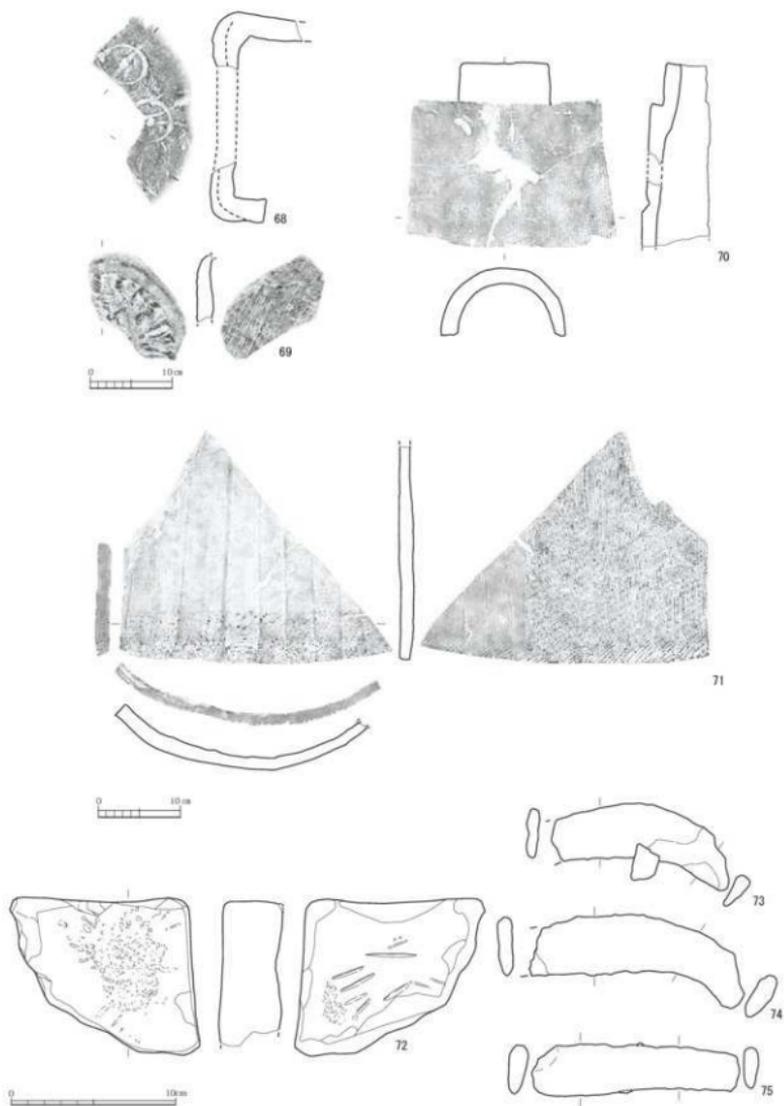


Fig12 SE002 出土遺物実測図 5 (1/4・1/6・1/3)

## 溝

規模が異なる大小の溝を8条検出した。小異はあるが、正方位から西偏するものと、ほぼ正方位をとるものの2つにまとまりが認められる。

### SD003 (Fig13)

調査区南側で検出した。北半は調査区外に延び、南側は攪乱に切られる。断面U字形を呈する。残存部北側の中層から、ほぼ完形の須恵器高坏が出土した。古墳時代後期の遺構か。

### 出土遺物 (Fig13)

76・77は須恵器で、76は高坏、77は坏身の口縁片である。

### SD004 (Fig13)

調査区南側で検出した。ほぼ南北方向に延びる溝で、後述する瓦廃棄土坑 (SK008・011) や総柱建物 (SB006)、越州窯系青磁碗が出土した SD042 と同じ方位軸をもつ。また、遺構実測図に図示したとおり、覆土中からは瓦がまとめて出土している。その他時期を決めうる遺物の出土はないが、上記の遺構と同時期に位置づけられるか。

### 出土遺物 (Fig13)

78は平瓦片である。凸面の調整は不明瞭、凹面には布目及び模骨痕が残る。

### SD009 (Fig14)

調査区南東部で検出した。SB006に切られる。SD010と直交しており、掘削後の底面のみを見ると、本遺構がSD010を切っているようであるが、両者は同時並存していた可能性もある。図示した甕から古墳時代後期以降の溝か。

### 出土遺物 (Fig14)

79は土師器甕。やや下膨れの器形である。特に外面にはハケの痕跡がわずかに残る。内面はケズリ仕上げである。

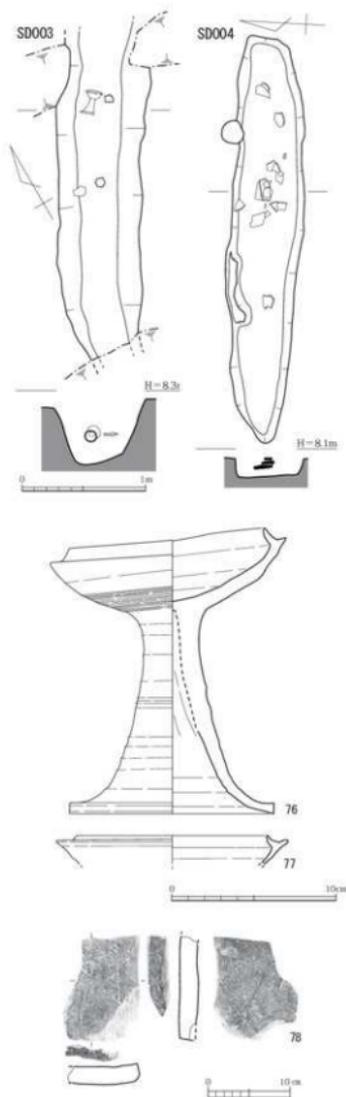


Fig13 SD003・004 実測図 (1/40)  
及び出土遺物実測図 (1/3・1/6)

#### SD010・018 (Fig14)

SD010は、調査区南東部で検出した。SB006に切られる。SD009と直交し、SD016とは平行する。延長線上にはSD018が位置し、同一遺構の可能性はある。須恵器や土師器の等が出土したが、図示し得る遺物はない。

SD018は、調査区南東部で検出した。上記の通り、SD010と同一遺構である可能性がある。土師器小片が少量出土したが、図示し得るものはない。

#### SD016 (Fig15)

調査区南東部で検出した。SK008、SK030に切られ、SC019、SC020を切る。遺構の東西端は比較的容易に遺構のプランを検出することができたが、SC019、SC020と切り合う中央部は、徐々に掘り下げながら遺構検出を試みたが、検出することができなかった。須恵器や土師器の他、ある程度まとまった数の弥生土器も出土したが、おそらく下面の住居に伴うものだろう。以下の出土遺物から6世紀後半～7世紀前半に収まると考えられる。

#### 出土遺物 (Fig15・16)

80～84は須恵器である。80は甕である。外面タタキ仕上げで、内面には同心円文当て具痕が残る。81は平瓶。胴部片を反転復元しているため、左右対称となっているが、本来は図より歪むものと考えられる。82は杯蓋である。天井部と体部の境に明瞭な段をもち、口縁端部にはわずかな段を有する。83・84は坏身である。83は口縁端部を丸くおさめ、天井部と体部の段もない。84は口縁端部に段を有する。内面には同心円文当て具痕が残る。85は移動式竈の庇である。86は平瓦。凸面にはわずかに平行タタキの痕跡が残る。87～89は弥生土器である。87は壺の口縁片。88は甗形壺の頸部～胴部片である。頸部に1条、胴部に2条の突帯をめぐらせる。突帯の断面ははいずれも鋭い三角形を呈する。89は器台。全体的に歪んでおり、左右差が大きい。

#### SD032 (Fig17)

調査区南西端部で検出した。検出レベルは標高6.5m前後で、削平を考慮しても地形の落ち際に立地するものと考えられる。調査区南側から北方向に延び、北側で西に緩く湾曲しながら折れる。深さは50cm前後残存し、断面はV字形を呈する。遺構の肩付近で対になる径が小さいピットを検出しているが、本遺構に付帯するものと考えられる。出土遺物から、古墳時代後期～古代に属する遺構と考えられるが、図示し得る遺物はない。

#### SD042 (Fig17)

調査区中央部で検出した溝である。調査区を横断する形で東西方向に延びるがSB006やSK008等と同様、ほぼ正方位に主軸をとる。断面は緩やかに立ち上がり、各所に段を有する。遺構の肩付近にピットが並ぶが、規則性がなく、ここでは別遺構として扱う。以下の出土遺物から古代の溝と考えられる。

#### 出土遺物 (Fig16)

90は越州窯系青磁碗の底部片である。蛇の目高台で、高台及び見込みに目跡が残る。91は高台付坏である。

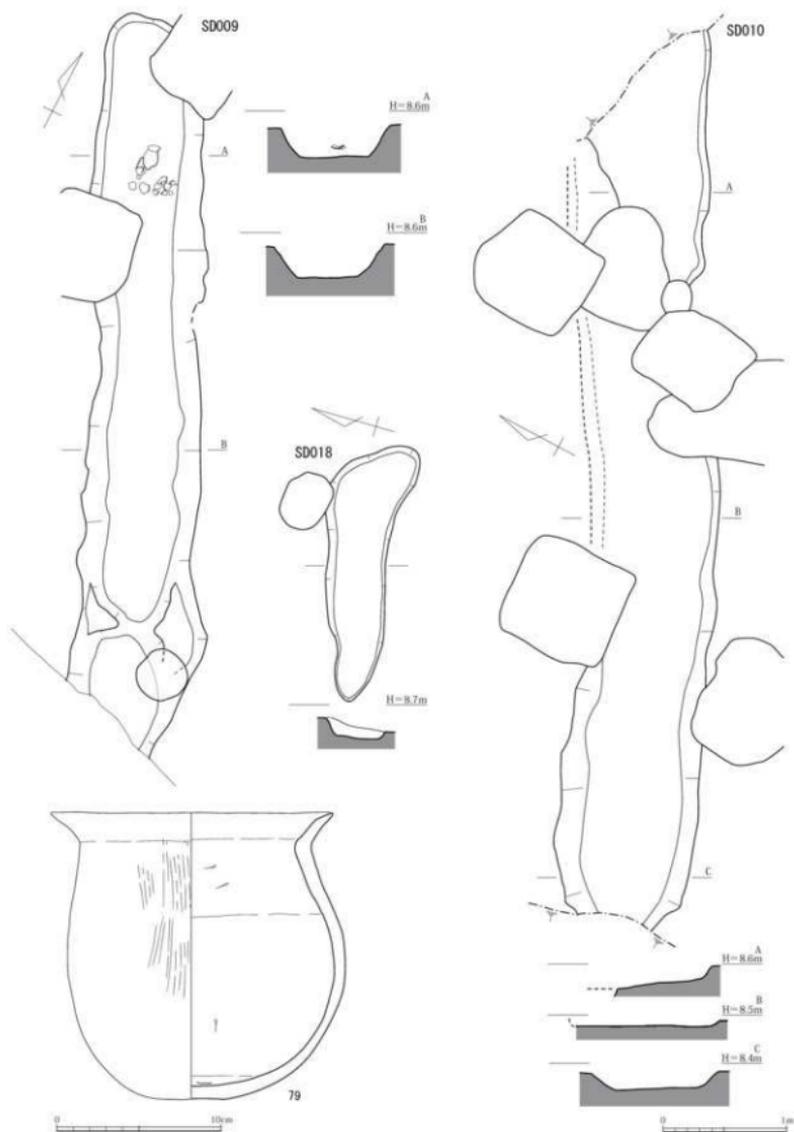


Fig14 SD009・010・018 実測図 (1/40) 及びSD009 出土遺物実測図 (1/3)

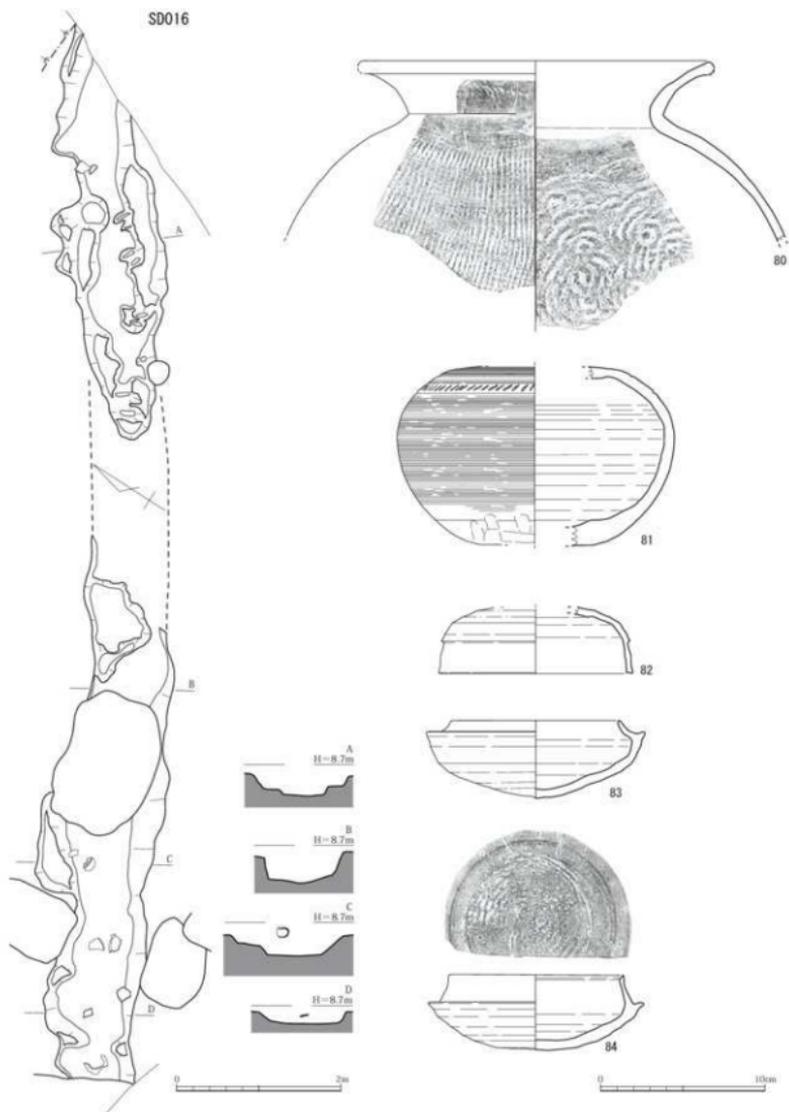


Fig15 SD016 実測図 (1/60) 及び出土物実測図1 (1/3)

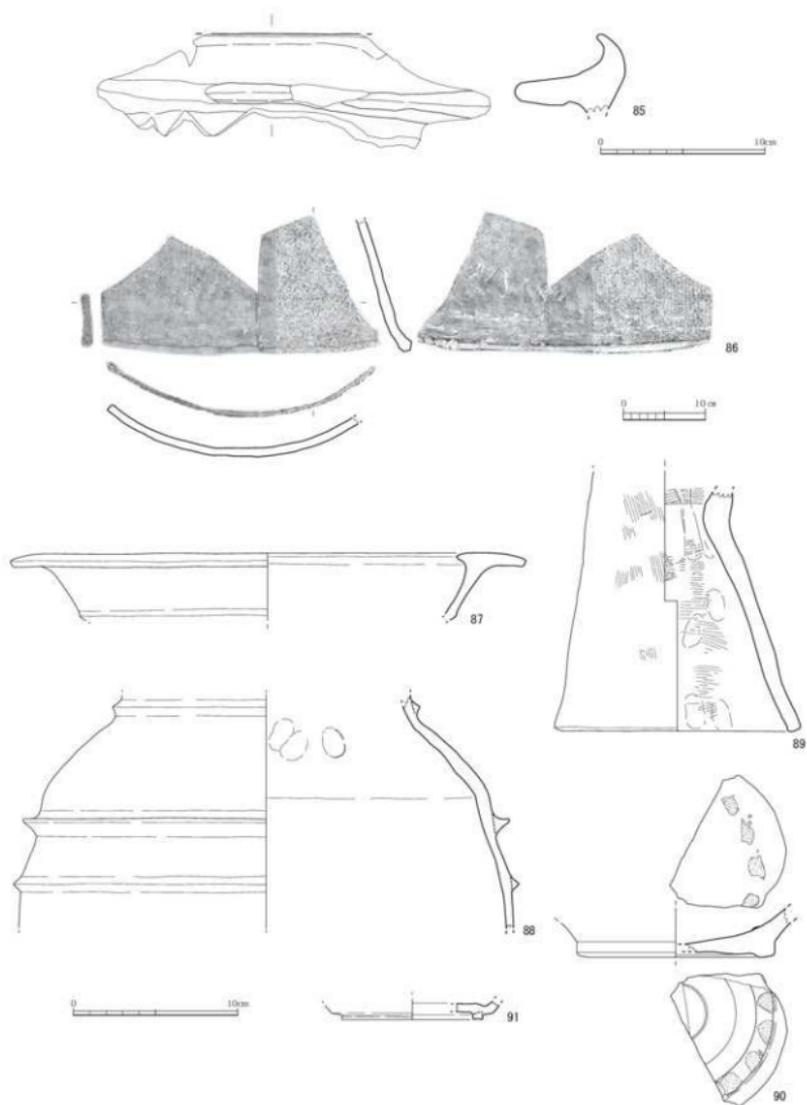


Fig16 SD016・042 出土遺物実測図2 (1/3・1/6)

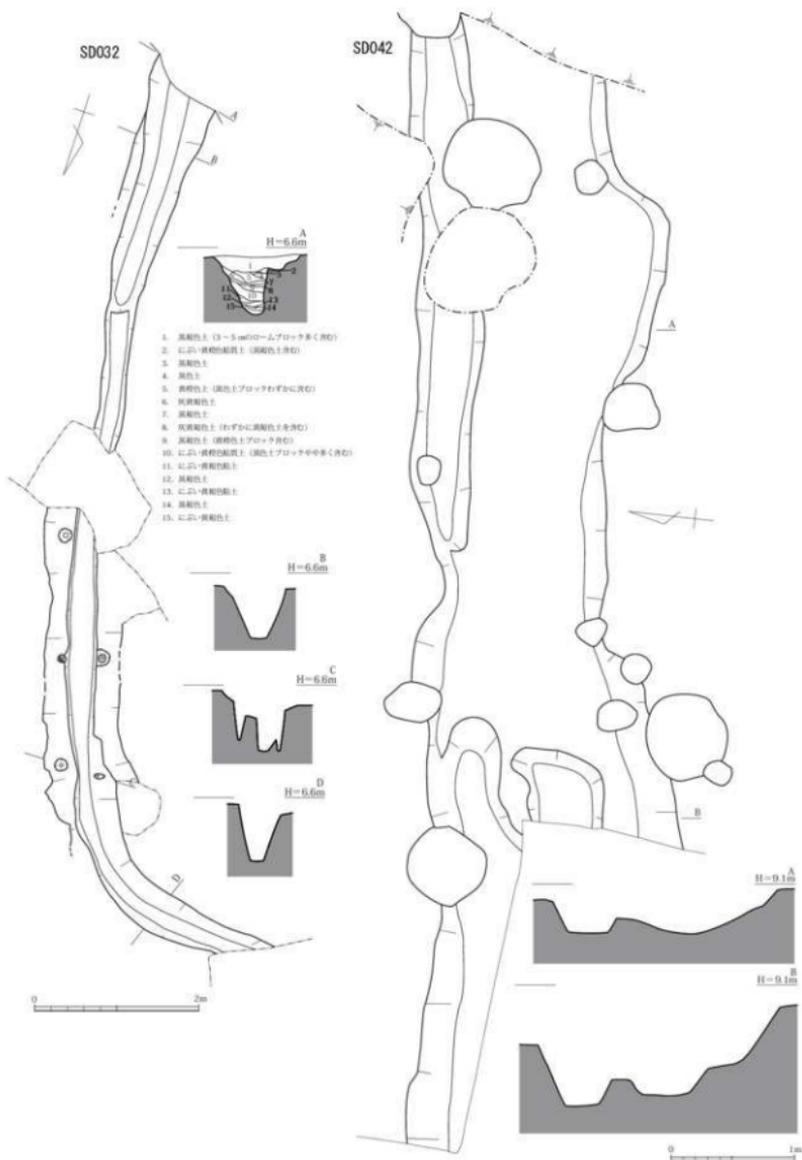


Fig17 SD032・042 実測図 (1/60・1/40)

### 掘立柱建物

掘立柱建物は1基検出した。その他当該期に属するピットは複数基検出しているが、建物として復元できるものはなかった。

### SB006 (Fig18・Ph1)

調査区の南端部で検出した。総柱建物で3間×2間分を検出した。西側の一部を擾乱によって切られるが、残存するその他の部分から2間以上になることはないと推定される。建物の軸はほぼ正方位をとる。柱穴は方形～隅丸方形で、ほとんどの柱穴で柱痕跡を確認している。また、複数の柱掘方から初期瓦片が複数点出土した。瓦は覆土中に混入しており、根巻きのような用途は考えられない。覆土への瓦の混入は本建物を建築した際に、一帯に瓦があったことを意味し、本建物に瓦が葺かれていた可能性も十分考えられる。出土遺物は少なく、時期幅があるが、図示した須恵器坏蓋等から7世紀後半前後の遺構とする。

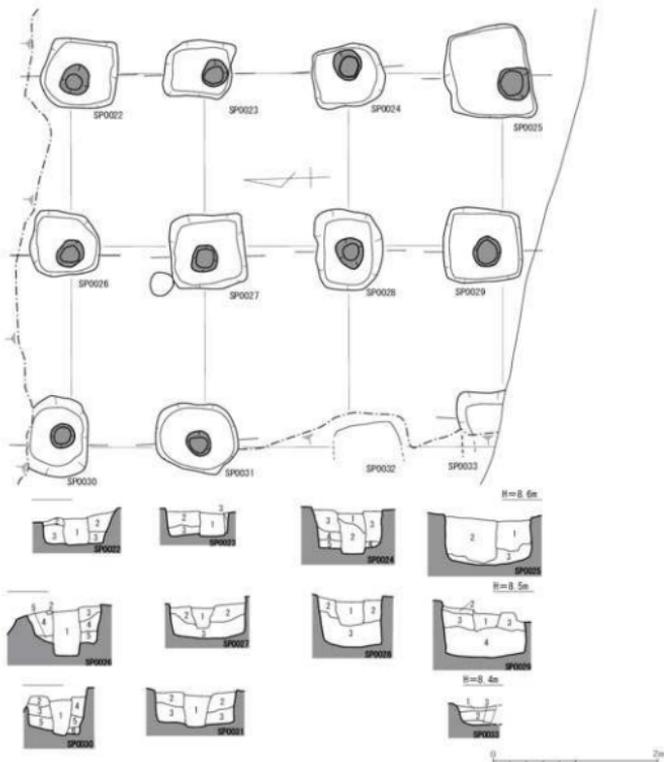
### 出土遺物 (Fig19)

92～98は須恵器である。92・93は坏蓋。92はつまみを有する。つまみはやや幅広のつぶれた宝珠形を呈する。天井部にはヘラケズリが施される。93は端部にかえりを有する。かえりと体部際はほぼ水平である。天井部にはヘラ記号が残る。94～97は坏身である。図示した坏蓋と比較し、やや古層を呈する。94～96は口縁部片である。97は底部片で、ヘラ記号を有する。98は甕の頸部片である。残存部の全体に自然軸がかかる。胴部上半には平行タタキが施される。99は土師器坏である。全体的に摩滅しており、調整は不明瞭。100は丸瓦である。外面は正格子タタキ仕上げ。内面には布目が残る。101～104は平瓦である。101は外面平行タタキ、内面にわずかに布目が残る。102は外面太い平行タタキで、内面には模骨痕、布目が残る。103は外面平行タタキで、内面には模骨痕、布目が残る。104の外面はヘラ状の工具によるナデ仕上げで、内面には模骨痕、布目が残る。



Ph1 SB006 検出状況 (東から)

SB006



SP0022

1. 緑灰色結晶土 (ロームブロックを多く含む)
2. 黒褐色結晶土 (わずかにロームブロック含む)
3. ローム由来の明褐色土 (黒色土ブロック含む)

SP0023

1. 緑灰色結晶土 (ロームブロックをやや多く、黒色土ブロックをわずかに含む)
2. 黒褐色結晶土 (わずかにロームブロック含む)
3. 緑褐色結晶土 (ロームブロックを少量含む)

SP0024

1. 緑灰色結晶土 (ロームブロックをやや多く、黒色土ブロックをわずかに含む)
2. 緑灰色～黒褐色結晶土 (ロームブロック、黒色土をごくわずかに含む)
3. 緑褐色結晶土 (ロームブロック少量含む)
4. ローム由来の明褐色土 (黒色土ブロック含む)

SP0025

1. 緑褐色結晶土 (ロームブロック含む)
2. 緑褐色結晶土 (ロームブロックをやや多く含む)
3. ローム由来の明褐色土 (黒色土ブロック含む)

SP0026

1. 緑褐色結晶土 (ロームブロックをやや多く、黒色土ブロックをわずかに含む)
2. 灰白色～白色の頁岩質土
3. 黒褐色結晶土 (わずかにロームブロック含む)
4. 緑褐色結晶土 (ロームブロック少量含む)
5. ローム由来の明褐色土 (黒色土ブロック含む)

SP0027

1. 緑褐色結晶土 (ロームブロックを多く含む)
2. 緑褐色結晶土 (ロームブロック少量含む)
3. ローム由来の明褐色土 (黒色土ブロック含む)

SP0028

1. 濃い黄褐色結晶土 (灰色結晶土を少量、黒褐色結晶土ブロックをごくわずかに含む)
2. 緑褐色結晶土 (ロームブロック少量含む)
3. 緑褐色結晶土 (ロームブロックをやや多く含む)

SP0029

1. 緑褐色結晶土 (黒色土粒をわずかに含む)
2. 褐色土 (ロームブロックをやや多く含む)
3. 黒褐色結晶土 (わずかにロームブロック含む)

SP0030

1. 緑褐色結晶土 (ロームブロックをやや多く、黒色土ブロックをわずかに含む)
2. 黒褐色結晶土 (わずかにロームブロック含む)
3. 緑褐色結晶土 (黒色土をわずかに含む)

SP0031

1. 緑褐色結晶土 (ロームブロック多く含む)
2. 緑褐色結晶土 (ロームブロック少量含む)
3. 緑褐色結晶土 (ロームブロック多く含む)

SP0033

1. 緑褐色結晶土 (ロームブロックをやや多く、黒色土ブロックをわずかに含む)
2. 黒褐色結晶土 (わずかにロームブロック含む)
3. 緑褐色結晶土 (ロームブロック少量含む)

SP0033

1. ローム由来の明褐色土 (黒色土ブロック含む)
2. 黒褐色結晶土 (わずかにロームブロック含む)
3. ローム由来の明褐色土 (黒色土ブロック含む)

Fig18 SB006 実測図 (1/60)

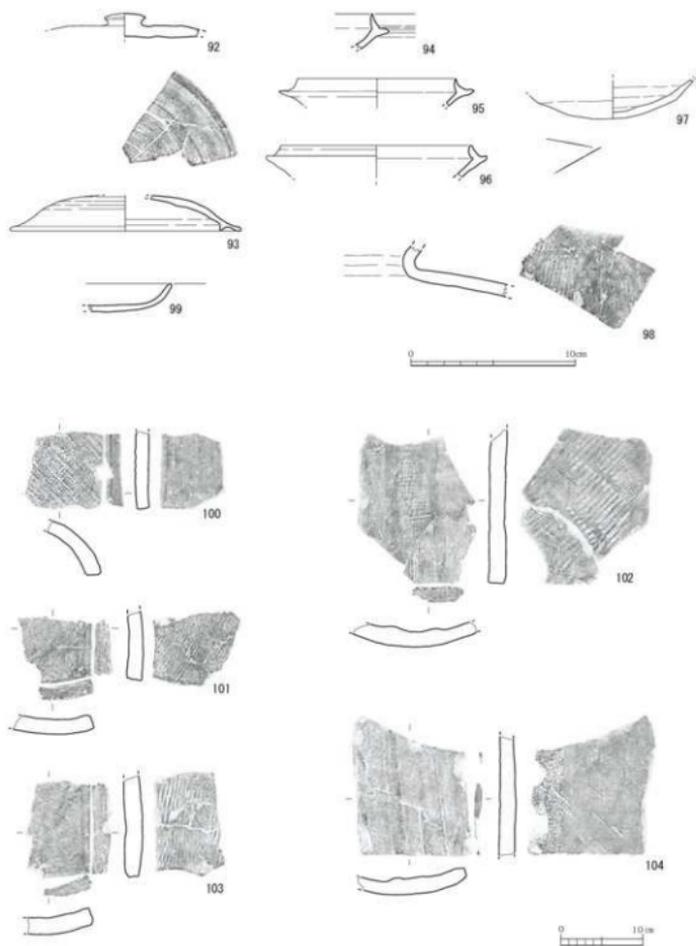


Fig19 SB006 出土遺物実測図 (1/3・1/6)

## 土坑

本時期の土坑は4基検出した。うち2基は初期瓦が一括廃棄された土坑である。

### SK008 (Fig20・Ph2)

調査区の南東端で検出した。検出面から底面にかけて初期瓦が隙間なく堆積した状態で出土しており、瓦を一括廃棄した遺構と考えられる。出土遺物のうち、瓦以外の遺物は図示したものを含みごくわずかである。平面形は方形を呈し、規模は、短辺が約200cm、長辺は掘方を検出できなかったため、定かではないが瓦の分布から300cm程度になると思われる。なお、検出時は、先に瓦群を確認しその後、掘り下げを行いながら、掘方の検出を試みた。東側については瓦群の東限に沿った形で土坑のプランを検出できたが、西側については確認し得なかった。瓦の出土状況からみて、整った方形であった蓋然性が高い。東西に長いが、前述した掘立柱建物(SB006)等と同様、主軸は正方位を指向しており、平面形や出土遺物における瓦が占める割合の高さ等とあわせて考えても、極めて計画的な遺構と考えられる。瓦廃棄の時期については、以下に図示した遺物から8世紀以降とするが、初期瓦については、既往の研究の結果、7世紀前半代に収まると考えられており、この時期差については検討の必要がある。本遺構からは、時期差があるとされている「神ノ前タイプ」と初原的な蓮華文瓦が共存していることを考え合わせると、瓦製作、ないしは供給から廃棄に至るまでに葺き替えや伝世等、一定の期間を要したものと考えられる。なお、本遺構の遺物取り上げに関しては、遺物の混入がないように、特に慎重を期した。

なお、本遺構出土遺物の中には、同じく瓦廃棄土坑と考えられるSK011出土遺物と接合するものがあることから、両者は同時期の遺構と考えられる。

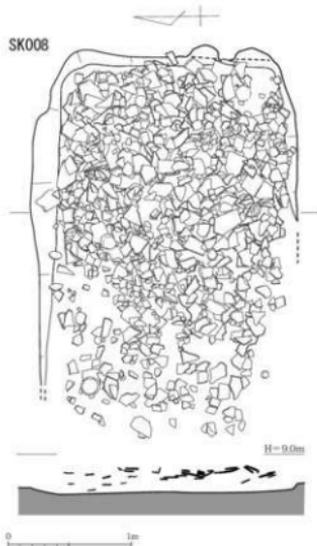


Fig20 SK008 実測図 (1/40)



Ph2 SK008 遺物出土状況 (東から)

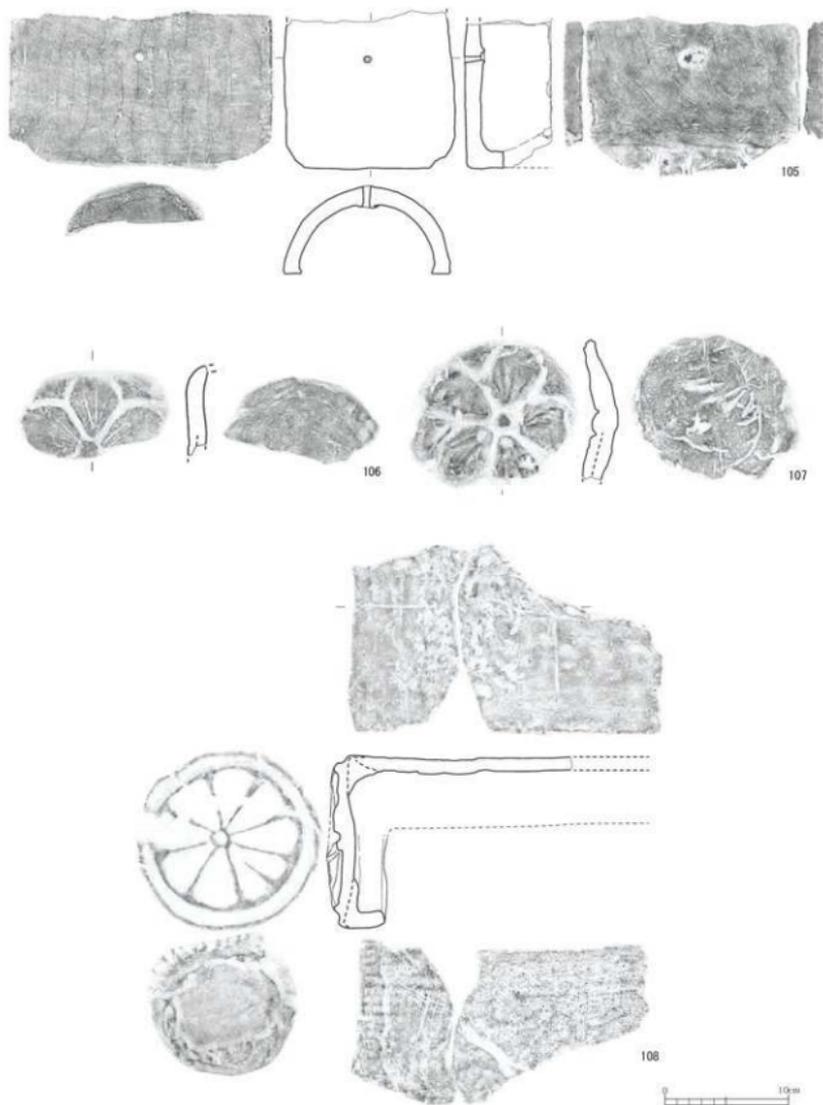


Fig21 SK008 出土遺物実測図1 (1/4)

出土遺物 (Fig21 ~ 31)

105 ~ 150 は瓦である。105 ~ 114 は軒丸瓦。105 はいわゆる「神ノ前タイプ」と呼称される無文の軒丸瓦である。泥状盤築技法により成形され、釘穴を有する。凹面、凸面ともに板状工具によるケズリに近いナデが施される。106 ~ 113 は蓮華文軒丸瓦である。106 は先端が丸みを帯びる蓮弁をもつ。残存部から5 ~ 6 葉に復元される。蓮弁内部には3 条の脈が表現される。瓦范が用いられているが、脈の部分は極めて細く、線刻によるものか。107 には5 葉の蓮華文が施文され、蓮弁内には106 同様、脈の表現がある。108 は9 葉素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当、及び丸瓦部が残る。蓮弁、中房は凹んで表現される。蓮弁は均等に8 つに割り付けられているが、うち1 つが2 つの弁に分けられ9 葉となっている。瓦当裏下半部には切り取った後の丸瓦部が周堤条に巡る。丸瓦凹面には竹状模骨、及び布目が残る。本遺物はSK011 出土遺物と接合する。109 は7 葉の蓮弁をもつ瓦当部で、やや稚拙だが、複弁蓮華文風に作られる。中房は二重圏文で表現される。瓦当裏下半部には粘土が周堤状に残る。110 は109 と同タイプであるが、蓮弁が6 葉である。111 は同心円文の当て具によって、7 葉の蓮弁と中房を表現する。瓦当裏面には周堤が巡る。112 は線刻によって蓮弁が表現されている。113 は6 葉か、線刻と竹管文状の痕跡蓮弁部が表現され、中房には蓮子が3 つ配される。瓦当裏面下半部には周堤が巡る。内側にはへら状工具による連続的な圧痕が残るが、内区と外縁部を固定させるための痕跡か。丸瓦部には竹状模骨が残る。114 も軒丸瓦と考えられる。外縁際に圏線状の凹みが残るが文様かどうか

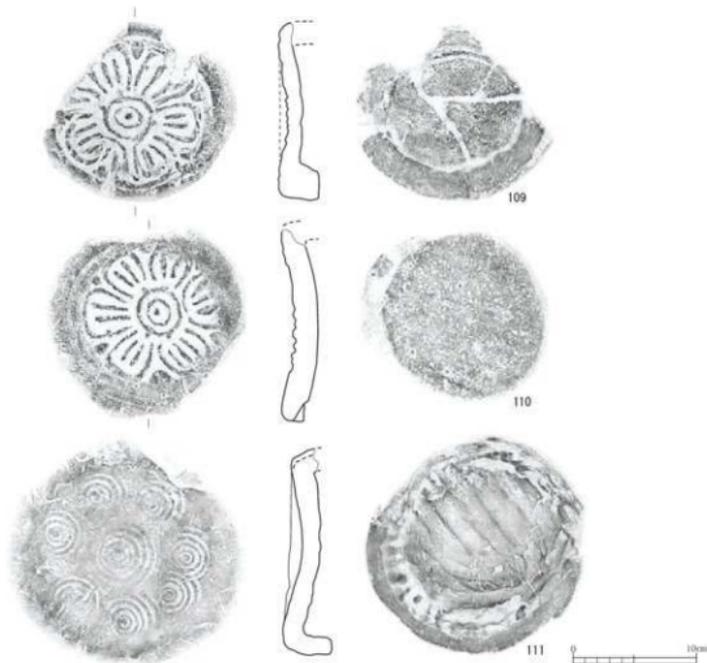


Fig22 SK008 出土遺物実測図2 (1/4)

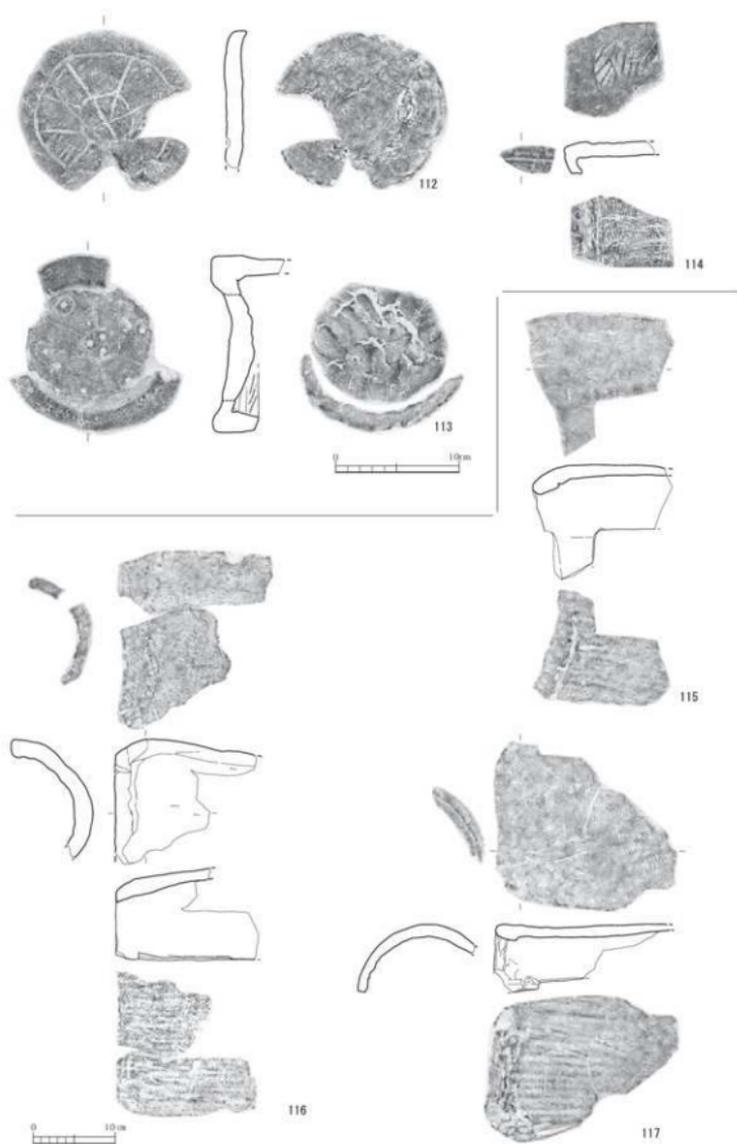


Fig23 SK008 出土遺物実測図3 (1/4・1/6)

かは定かではない。外面は平行タタキで、内面には布目が残る。115～135は丸瓦である。115の丸瓦は、先端に粘土が剥がれた痕跡があり、また一部が切り取られていることから、軒丸瓦の可能性もある。丸瓦部の凹面には竹状模骨痕及び布目が残る。なお、図の断面部分のみは別の部分で図化し、図上で復元している。116の外面はヘラケズリ仕上げで、内面に布目が残る。先端部の粘土が剥がれており、軒丸瓦の可能性もある。117も軒丸瓦の可能性もある丸瓦。凸面は平行タタキの後ナデ仕上げ、凹面には竹状模骨痕と布目が残る。118～121はいずれも釘穴を有する丸瓦。一部不明瞭なものもあるが、模骨丸瓦で外面は平行タタキが施され、一部ナデ消しが行われる。確認し得るものは全て無段式である。122～135も模骨丸瓦で、外面は平行タタキ、もしくはその後にナデ消しを行っている。136～150は平瓦である。いずれも桶巻き作りの平瓦で、叩打痕のうちほとんどが平行タタキ目であ

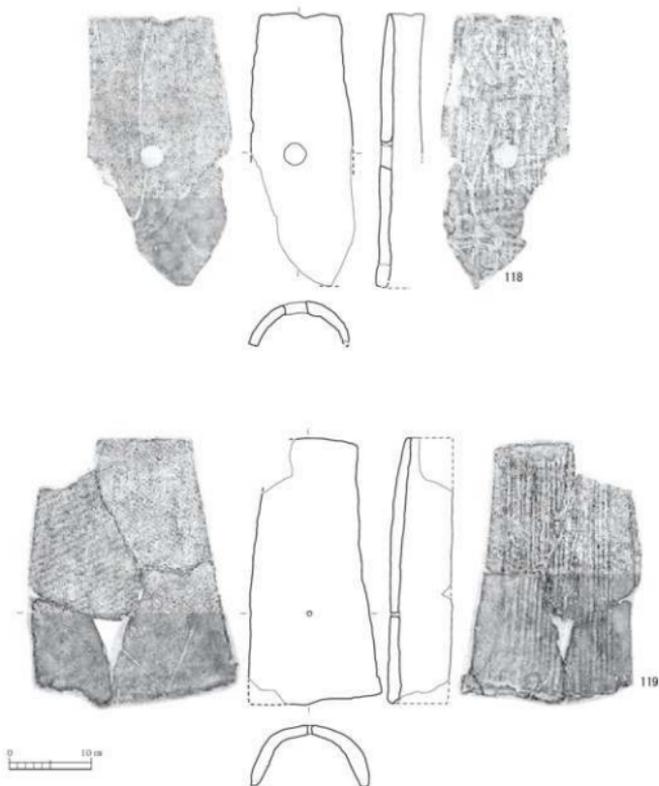


Fig24 SK008 出土遺物実測図4 (1/6)

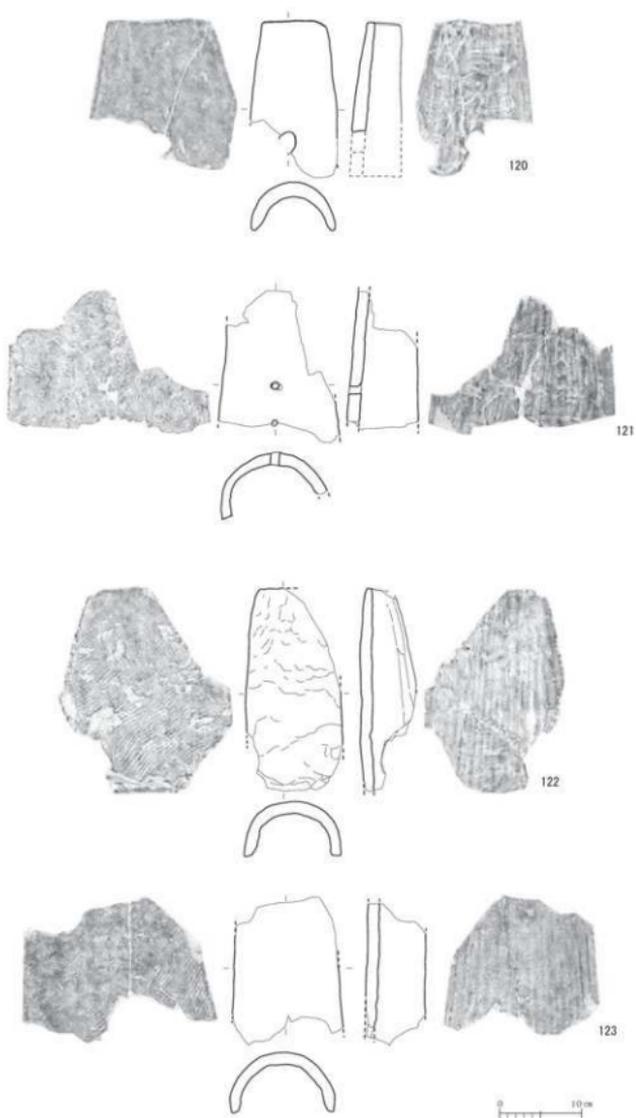


Fig25 SK008 出土遺物実測図 5 (1/6)

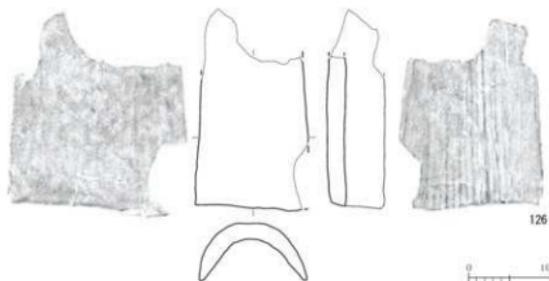
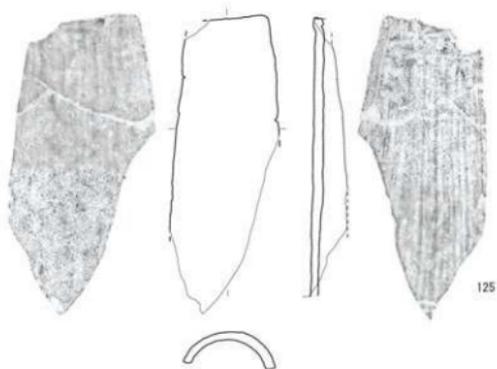
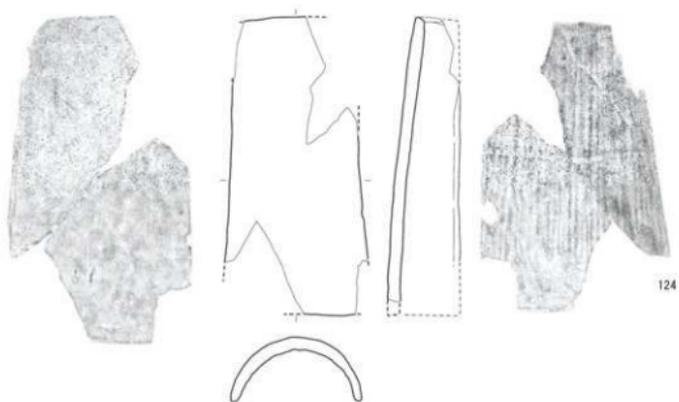


Fig26 SK008 出土遺物実測図 6 (1/6)

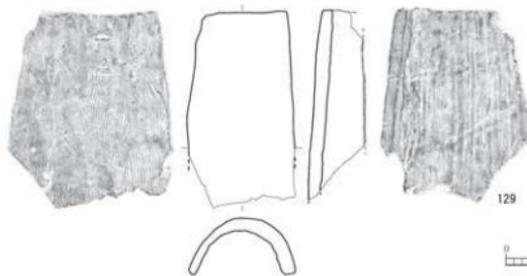
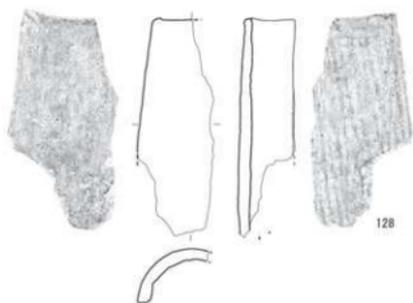
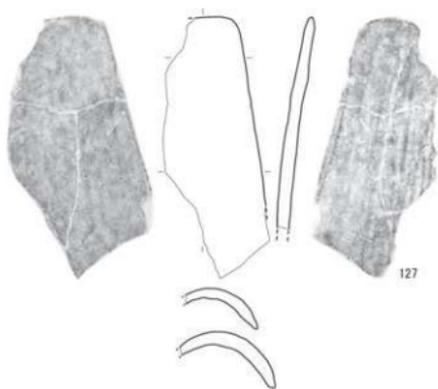


Fig27 SK008 出土遺物実測図7 (1/6)

る。144の凹面には、成形後、補足の叩き締めを行った際に使用したと考えられる同心円文当て具痕が残る。151～161は瓦以外の出土遺物である。151～158は須恵器である。151・152は坏蓋。151の器高は低く、口縁端部は丸く取められ、わずかに段を有する。つまみの有無は不明。152は口縁端部片。端部をわずかに下方に折り曲げ、内側には沈滞が残る。153～155は坏身で、いずれも口縁片である。156は高台付坏の底部片。高台は低く体部との境は丸みをもつ。157は甕の口縁～頸部片である。頸部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に擴み出される。158は高坏の裾部である。159・160は土師器である。159は高台付坏。高台はやや小さく、断面は三角形形状を呈する。160は坏の底部片である。161は移動式竈の庇部分である。

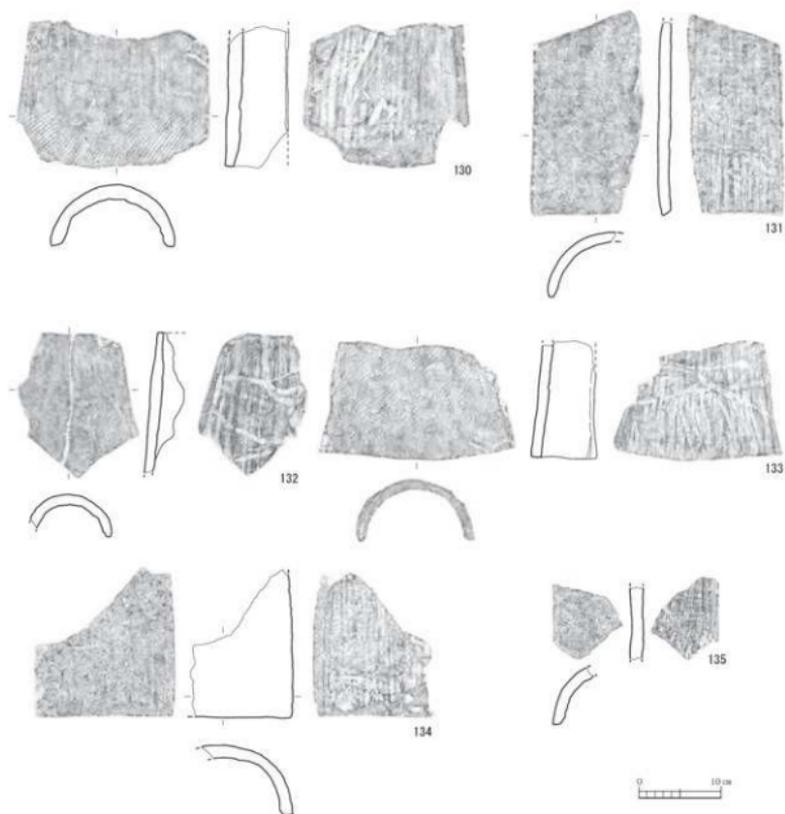


Fig28 SK008 出土遺物実測図8 (1/6)

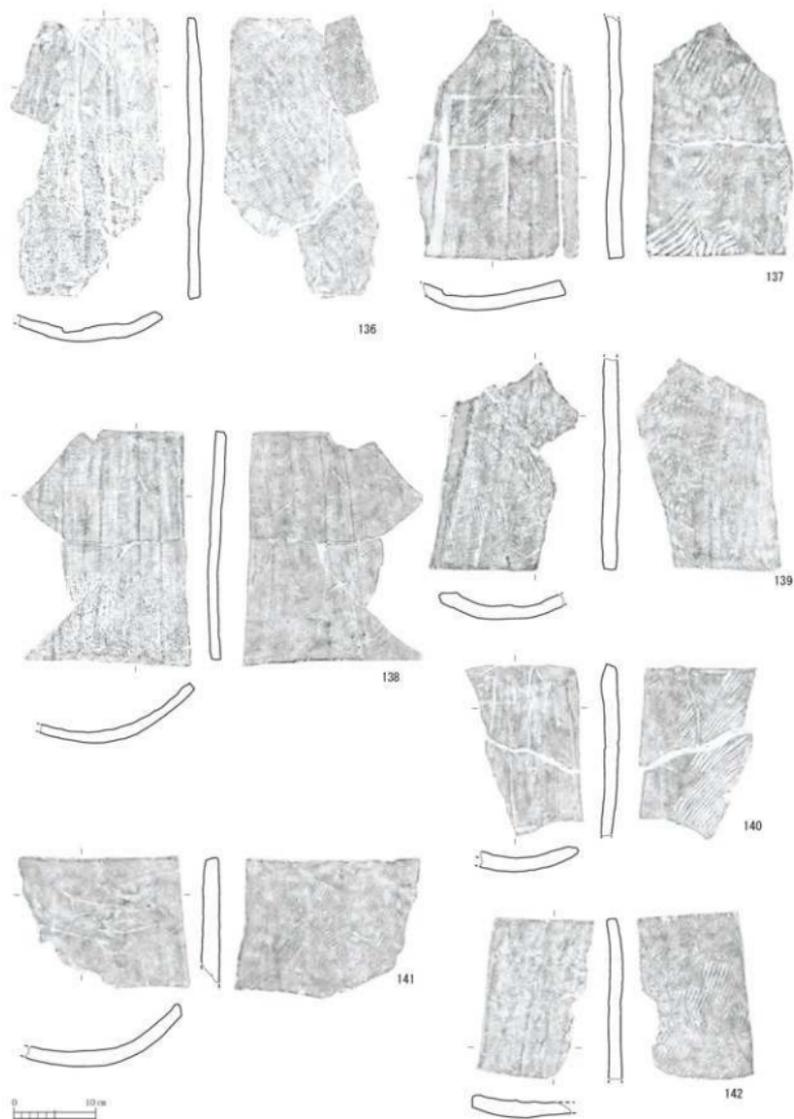


Fig29 SK008 出土遺物実測図9 (1/6)

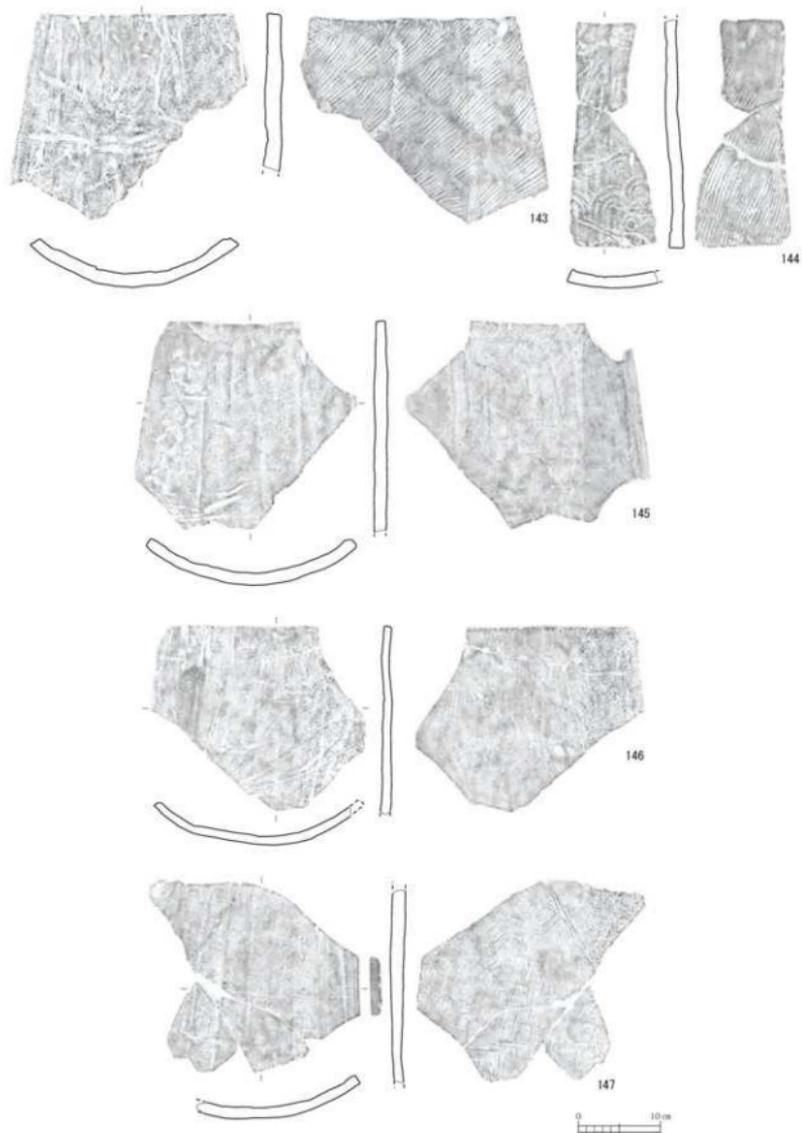


Fig30 SK008 出土遺物実測図 10 (1/6)

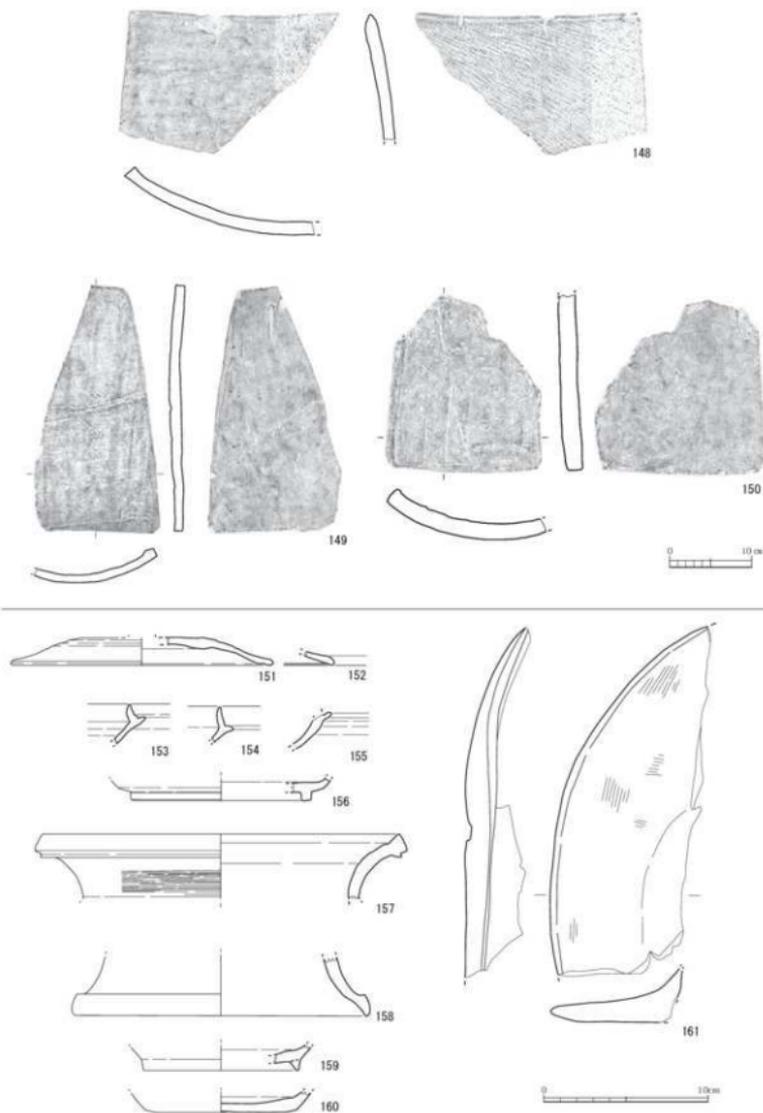


Fig31 SK008 出土遺物実測図 11 (1/3・1/6)

### SK011 (Fig32・Ph3)

調査区の南東部の調査区際で検出した瓦一括廃棄土坑である。遺構の東側は調査区外に延びる。残存部から推定して、SK008 同様、平面は整った方形を呈するものと考えられ、正方位に主軸をもつ。表土掘削時に瓦のまとまりとして検出し、記録後に掘り下げを行ったところ、下層の瓦及び、掘方を検出した。遺構南側については、他の遺構と切り合っており、瓦の分布状況を加味し、精査しながら掘り下げを行ったが、検出することができなかった。

SK008 の瓦の検出レベルはほぼ同じであった野に対し、本遺構は、瓦群の検出レベルに差があり、北西側が高く、南東がわずかに低い。瓦投棄の状況を示しているであろう。

本遺構からは時期を特定できる遺物は出土していないが、遺構の共通性や遺物が接合することから、SK008 と同時期と判断できる。

### 出土遺物 (Fig33～36)

SK008 同様出土遺物の大半は瓦である。162～172は軒丸瓦である。162は「神ノ前タイプ」の無文軒丸瓦。色調や胎土からSK008出土のものと同一体の可能性がある。本遺物は瓦当下半の周堤部が残存することから、神ノ前タイプの軒瓦が円形を呈することが明らかになった。163は小片である。残存部は無文で、丸瓦部は内外面ともにナデ仕上げ。泥状盤築技法により成形されており、瓦当内面から丸瓦凹面にかけて明瞭な境をもつことなくつながる。神ノ前タイプの軒丸瓦か。164～168瓦范を用いて施文されている。164～166はSK008でも出土している複弁蓮華文風の軒丸瓦である。164は小片のため花弁の単位は不明。瓦当部分は極めて薄い。165はやや雑なため花弁の単位が分かりづらいが、7葉か。下半には周堤が巡る。166は6葉である。167は5葉で、蓮弁内に3条の脈を表現する。子葉としていいものか。中房には5つの蓮子が配される。168は月ノ浦窯跡出土軒丸瓦に類似する。ただし、本遺物は月ノ浦窯

SK011

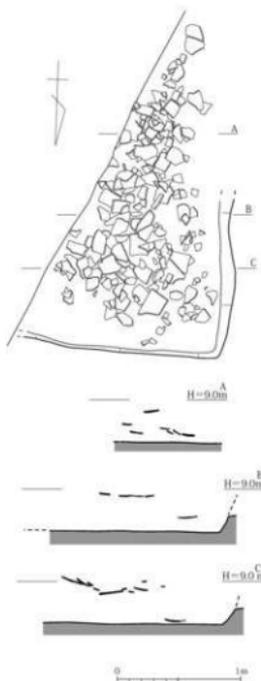


Fig32 SK011 実測図 (1/40)



Ph3 SK011 上層遺物出土状況 (南東から)

出土例と比較して、雑である。また、大きな違いとして、月ノ浦出土のものは、素弁であるのに対し、本遺物は運弁の一部に子葉の表現があり単弁を意識している点が挙げられる。169～171は線刻によって施文される。169は運弁、中房ともに線刻によって施文され、運弁は10葉を数える。瓦当表面、及び周堤外面には同一の原体と考えられる平行タキが施され、線刻による施文はその後で行われている。瓦当裏面には「又」字状のヘラ記号をもつ。170の瓦当片も平行タキの後に線刻されている。171は菱形で先端が尖る運弁を5つ配する。中房の外周も線刻で表現されるが、中心部が高く盛り上がる。172の瓦当は外縁部のみが残存する。周堤の内側には竹状模骨痕が残る。173～178は丸瓦である。173は泥状盤築技法によって成形される。神ノ前タイプの丸瓦だろう。丸瓦部のみ残存しているが、軒丸瓦の可能性もある。凸面、凹面ともにヘラ記号が施される。174～178はいずれも模骨丸瓦である。177・178は有段式。176は凸面に格子タキ痕が残る。179～187は平瓦である。いずれも桶巻き作りによる。179は凹面に同心円文当て具痕が残り、凸面の平行タキは密に残る。188は円筒状の土師質土器である。高環の脚部か。189・190は滑石性白玉である。

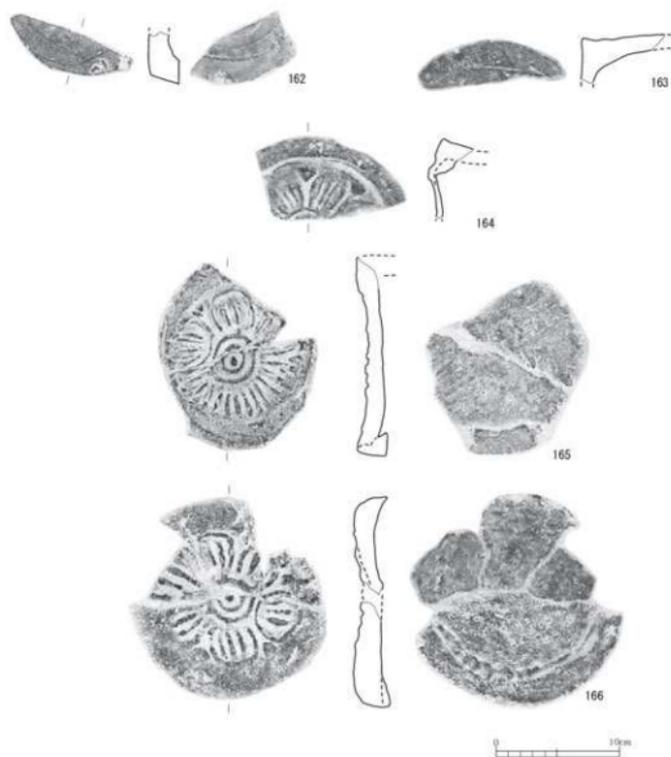


Fig33 SK011 出土遺物実測図1 (1/4)

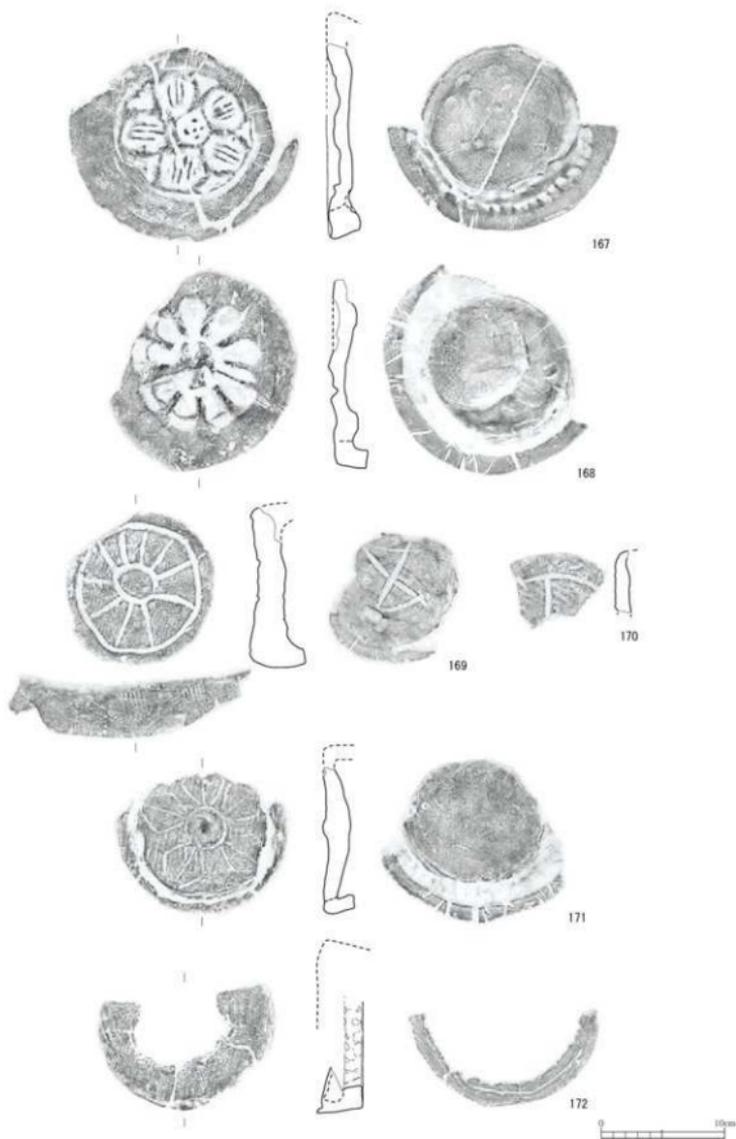


Fig34 SK011 出土遺物実測図 2 (1/4)

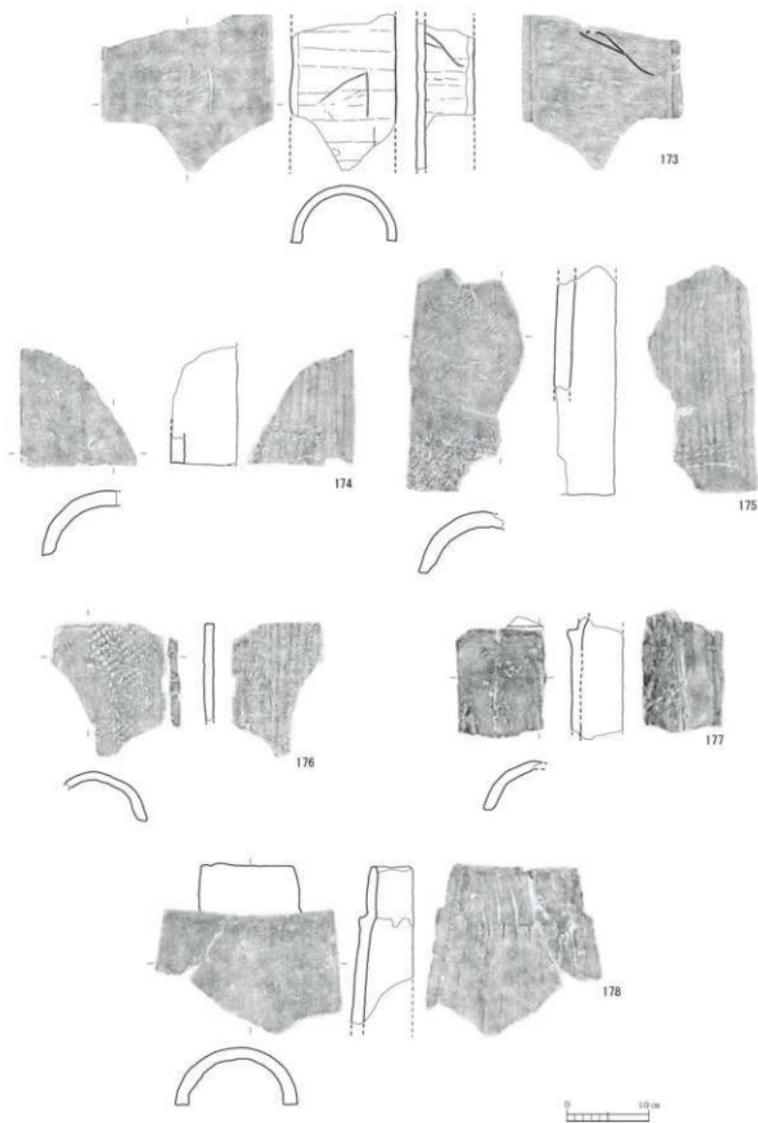


Fig35 SK011 出土遺物実測図3 (1/6)

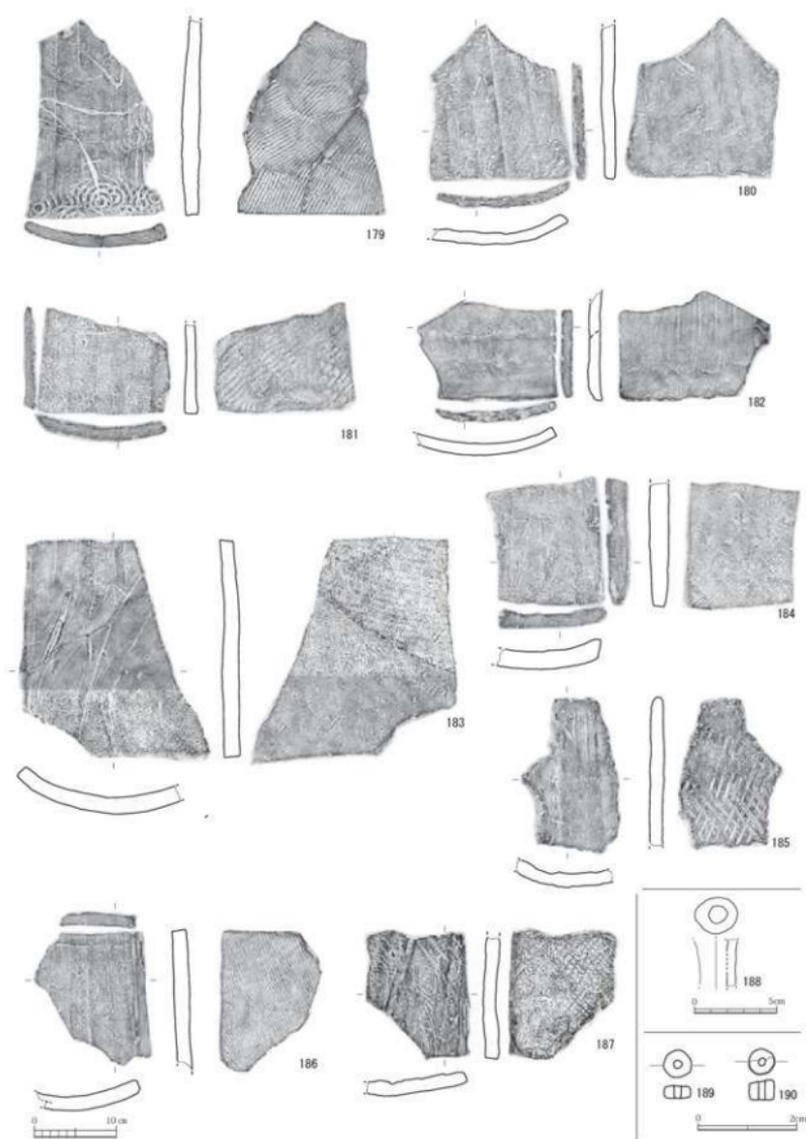


Fig36 SK011 出土遺物実測図4 (1/6・1/3・1/1)

### SK017 (Fig37)

調査区南側やや東寄りで検出した。北側を攪乱によって切られる。平面不整形の土坑である。須恵器、瓦が出土した。図示した須恵器は時期を示す基準になるが、時期特定にかかる遺物が1点であることと初期瓦が出土していることから、時期幅をもたせ6世紀後半～7世紀の遺構とする。

### 出土遺物 (Fig37)

191は須恵器坏身である。器高はやや低い。細い口縁部はやや内傾し、端部は丸く収める。192・193は丸瓦である。192は釘穴を有する。

### SK30 (Fig38)

調査区南側やや東寄りで検出した。SD016と重複しており、本遺構が切る。平面はやや歪んだ略方形を呈する。時期はSD019との関係から、6世紀後半～7世紀前半前後とする。

### 出土遺物 (Fig38)

194・195は須恵器である。共にSD016出土遺物と接合する。194は坏蓋である。内面には当て具痕が残る。195は坏身である。内面に当て具痕が残る。

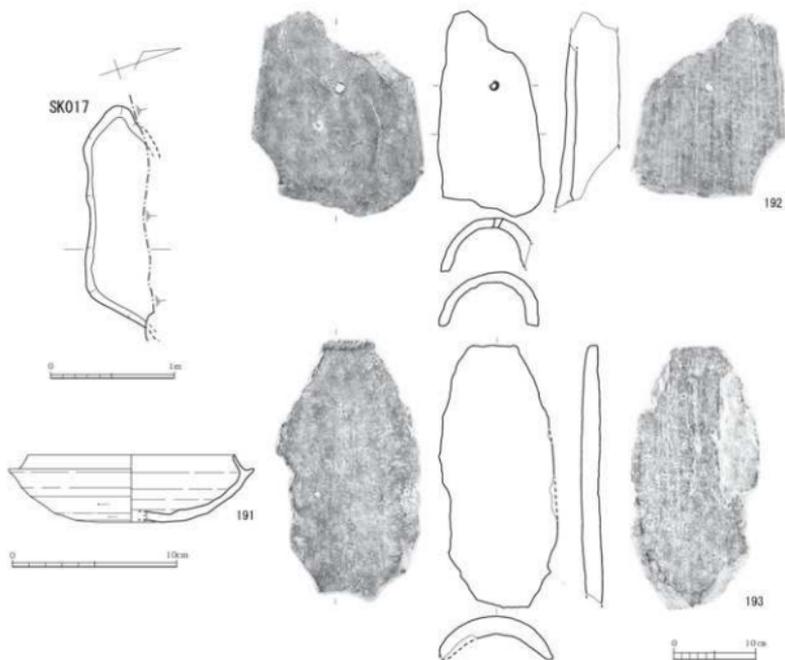


Fig37 SK017 実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3・1/6)

### 不明遺構

調査区南東部で瓦が集中的に出土した。掘方は検出できなかったが、ここでは遺構として報告する。

### SX064 (Fig38)

遺構検出時点で、瓦のまわりを確認し、その後、掘方の有無や、瓦の分布がどこまで広がるか等を精査しつつ掘削したが、瓦の範囲は図示した範囲に留まり、掘方も検出できなかった。直下に弥生時代の SK023 が位置するが、遺構埋没最終段階における窪みへの堆積とするには時期差がある。



### 出土遺物 (Fig38)

196 は丸瓦である。外面は平行タタキ、内面には竹状模骨痕が残る。197～199 は平瓦である。いずれも桶巻き作りで成形される。197 の凸面には格子タタキが残り、198・199 はナデ仕上げである。

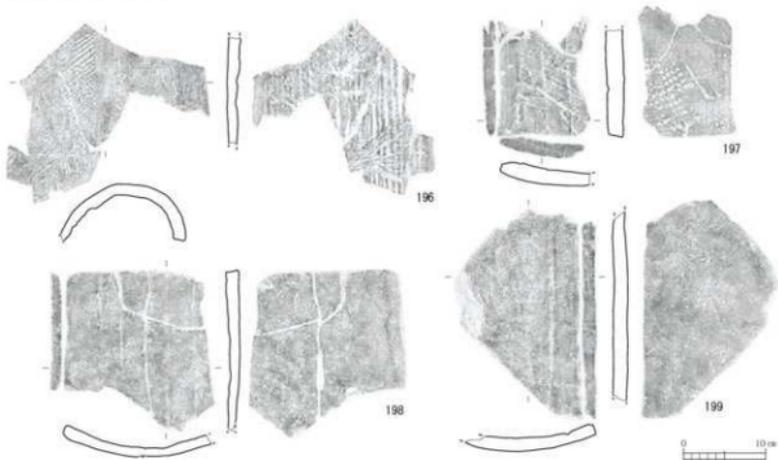


Fig38 SK030・SX064 実測図 (1/40・1/20) 及び出土遺物実測図 (1/3・1/6)

## 2) 弥生時代中期～古墳時代前期の遺構と遺物

### 井戸

本時期に属する井戸は1基検出した。

#### SE031 (Fig39)

調査区南西部で検出した。少なからず現代の造成の影響を受けているものの、遺構検出面から深さ約220cmが残存している。検出レベルは標高6.7前後である。検出面の地山はローム下部の灰白色粘質土上であるが、標高4.7～4.8m前後で黒褐色シルトに切り替わる。掘削中は絶えず、水が湧水するような環境であり、底面付近の調査は重機による半裁の後、安全面を確保して行った。遺構の上にはテラス状の段が見つかるが、井戸造営当時のものか、湧水に起因するものかは不明である。遺構中層～下層にかけて完形の遺物がまとまりをもって出土した。井戸にかかる祭祀の痕跡と考えられる。以下に図示した遺物等から、本遺構の時期は弥生時代中期後半～末と考えられる。

なお、本遺構の検出地点は台地の西端部付近であり、以西には河川堆積が広がる。

#### 出土遺物 (Fig40～42)

出土遺物のうち、完形もしくはそれに近い遺物にはNo.1～No.6の取り上げ番号を付した。200～205が番号を付した土器群である。200は袋状口縁壺である。全面を丹塗りし、外面は丁寧なミガキによって仕上げられている。201も袋状口縁壺である。器高は低く、頸部も短い。頸部はやや内傾しながら立ち上がる。頸部と口縁部との境は明瞭で、内外面に稜線をもつ。202～205は直口壺である。202の口縁の立ち上がりは直線的で、端部はヨコナデによって平坦面を作り出す。胴と口縁の境目やや上に前後で対になる2カ所の穿孔を有する。穿孔は焼成前に行われる。胴下半は斜め方向、胴上位～口縁には縦方向の丁寧なハケによって仕上げられている。内面に成形時の指頭痕が残る。203の口縁は緩く外反しながら立ち上がり、口縁端部は丁寧なヨコナデが施される。外面はタテハケ、内面には指頭痕が残る。前後に対になる穿孔を有する。204の口縁も緩く外反しながら立ち上がる。外面縦方位のハケ仕上げで、胴部のハケ目はナデ消されるが、頸部には丁寧で細かいハケの痕跡が残る。前後で対になる穿孔が2カ所あるが、わずかにずれる。205は穿孔のための痕跡が残るが、貫通していない。外面の調整後、丁寧にナデで仕上げる。206は袋状口縁壺の口縁片である。207も袋状口縁壺と考えられる。頸部片、胴部上位片、底部～胴部下位片を図上復元した。208は壺の底部～胴部片である。丸みをもつ。209は器台。器壁は厚く、全面にナデの痕跡が残る。210は大型の甕である。胴下半以下を打ち欠く。遺構検出時に井戸に沿う形で出土したことから、井戸枠として使用されていたものと考えられる。211・212も大型の甕である。212は210同様、胴下半を打ち欠いている。

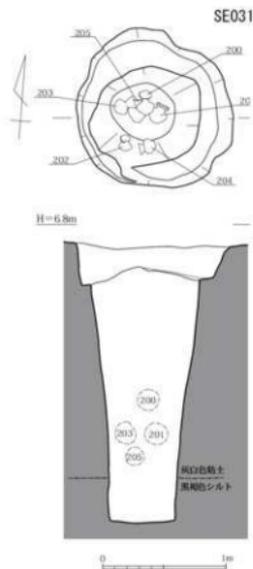


Fig39 SE031 実測図 (1/40)

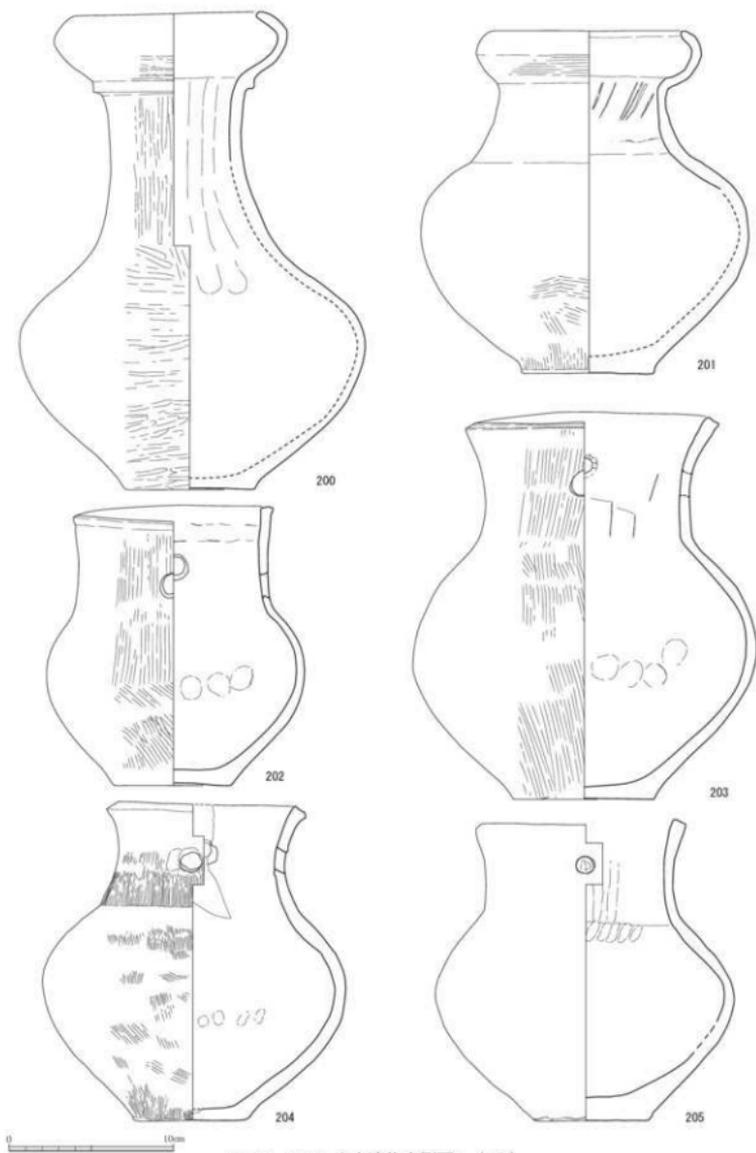


Fig40 SE031 出土遺物実測図1 (1/3)

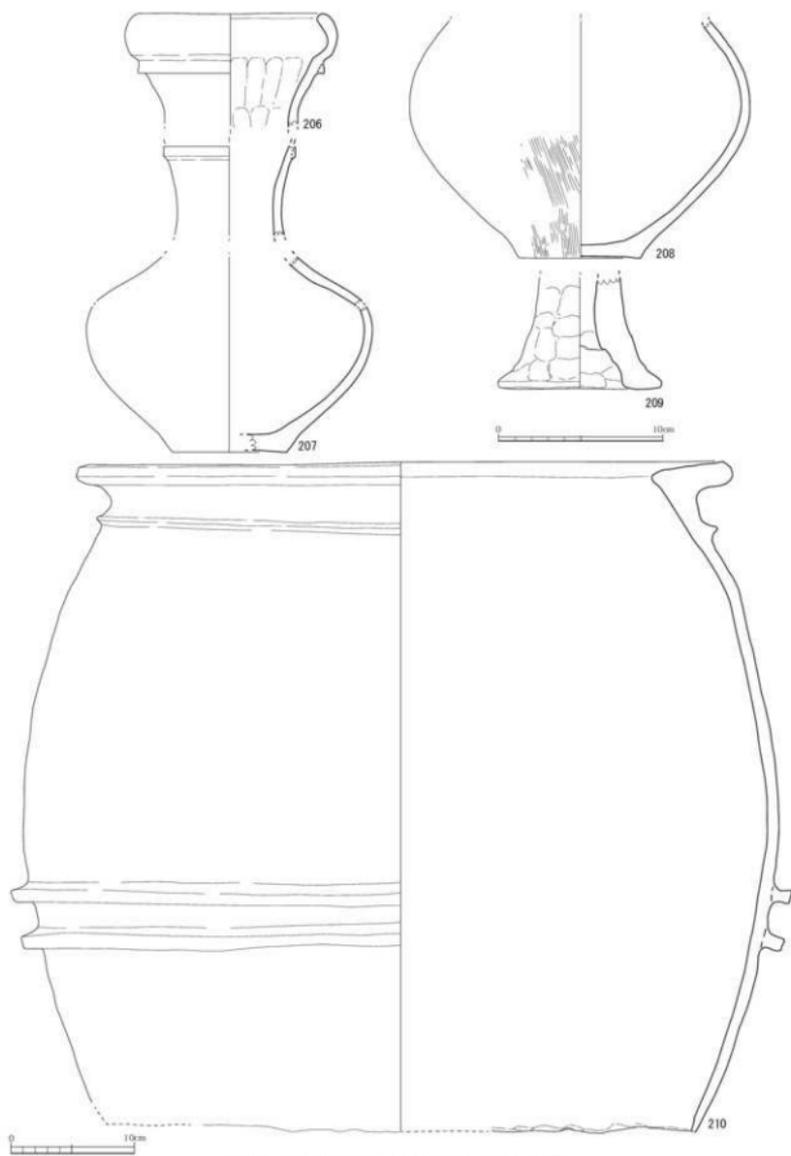


Fig41 SE031 出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

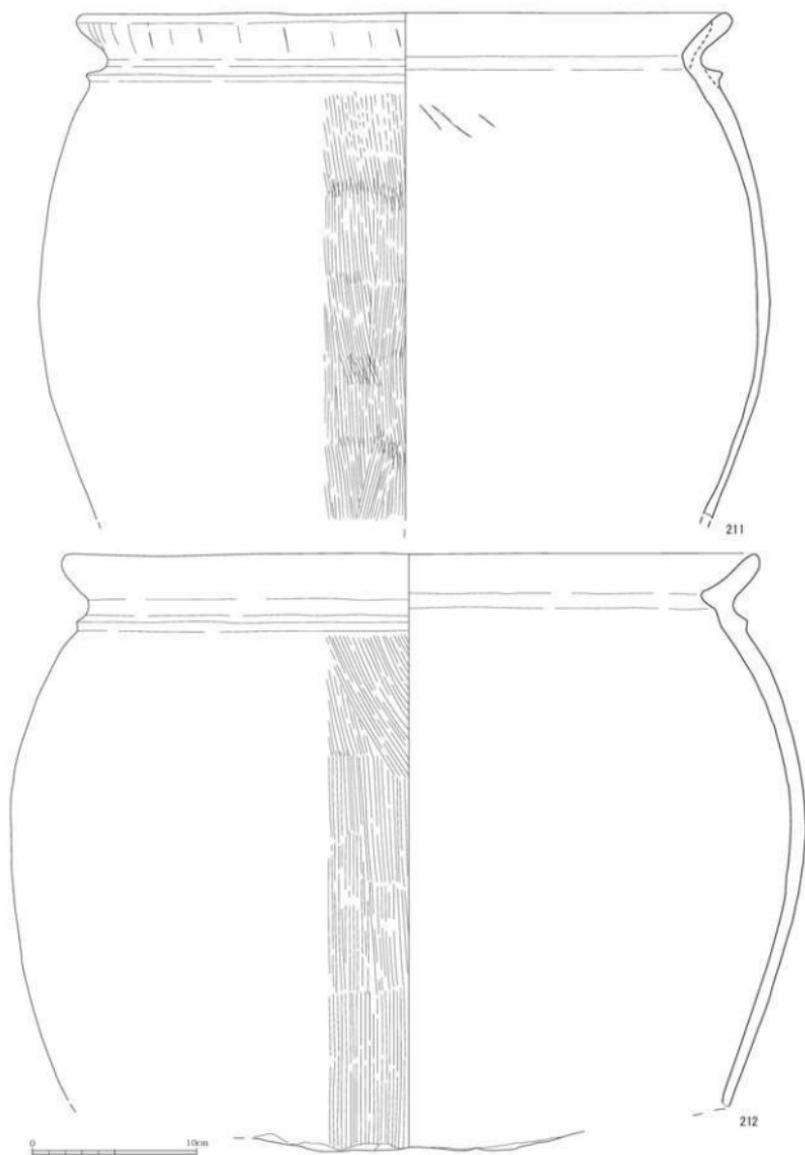


Fig42 SE031 出土遺物実測図 3 (1/3)

## 溝

2条検出した。両者とも出土遺物が少なく、図示した出土遺物が1点のみで詳細な時期は不明であるが、本時期に属すると考えられる。

### SD047 (Fig43)

調査区中央部で検出した東西方向の溝である。南西端は攪乱によって切られる。ほぼ直線的に伸びており、付近に位置する竪穴住居 SC046・048・054と同じ軸をもつ。残存部のほぼ中央が土坑状に窪む。底面は平らで断面は逆台形状を呈する。以下図示した遺物は弥生時代後期後半代に属すると考えられるが、その他時期を特定できる遺物がないため、弥生時代後期後半以降の溝と報告する。

### 出土遺物 (Fig43)

213は複合口縁壺の口縁片である。屈曲部は鋭い。口縁端部には成形時の指頭痕が規則的に残る。

### SD055 (Fig43)

調査区中央部のSD047の東で検出した。ほぼ直線的に延びる溝である。両端をビットによって切られる。SD047及び、周辺のその他の竪穴住居とはやや軸が異なり、本遺構の南側に位置するSC001と近い軸をもつ。出土遺物は図示したものの他に弥生土器を複数点確認している。弥生時代中期中頃を上限とする弥生時代の遺構であろう。

### 出土遺物 (Fig43)

214は壺の底部片である。その他、同時期前後と考えられる高坏の脚部が出土している。

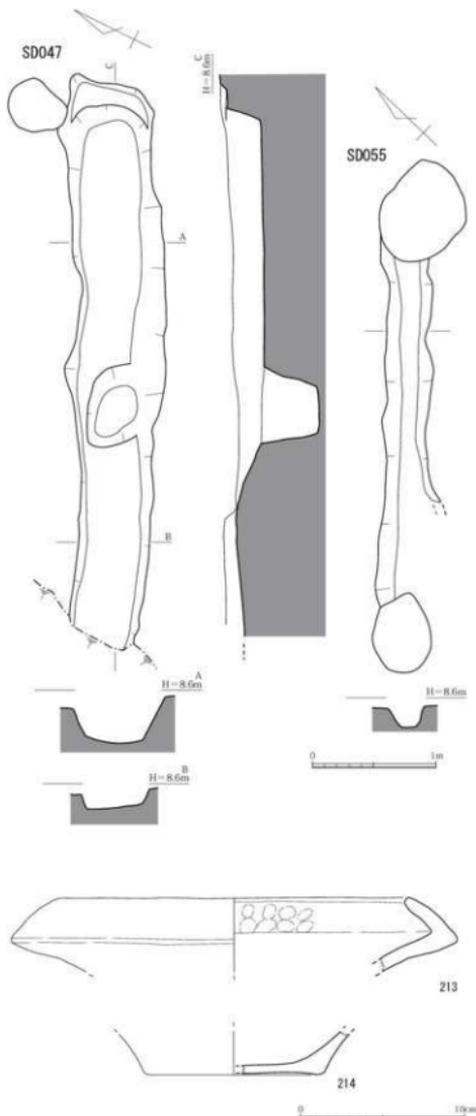


Fig43 SD047・055 実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

## 竪穴住居

竪穴住居は、18棟検出した。このうちSC051は、古墳時代後期と考えられ、SC001もその可能性があるが、これと切り合う住居と同時に記録したため、ここで報告する。古墳時代前期に属すると考えられる住居のうちSC020・033・044は焼土や炭化した建築部材と考えられる木質を確認している。廃絶にあたって焼失したものと思われる。また、これら住居の中には壁溝の一部が二重になるもの(SC015・033)や、これに加え、短い溝をもつものもある(SC038)。

### SC001・SC007 (Fig44)

調査区中央やや南寄りで検出した。小型の住居(SC001)とこれに切られる溝状の遺構(SC007)である。007については、通常の溝とするには細いこと、南西側が一段低くなっていることから住居と判断した。001は一辺210cm前後に復元できる。出土遺物は極めて少ない。001からは須恵器の小片が出土した。本遺構直上に擾乱があったため、混入の可能性もあるが、古墳時代後期以降に属するものか。007については上記の段を認識し、該当部分の出土遺物のみを本遺構出土遺物として取り上げたが、図示し得たのは以下の混入資料1点のみである。

### 出土遺物 (Fig44)

215は夜白式土器甕の口縁片である。

### SC012 (Fig44)

調査区南側やや東寄りで検出した細い溝状遺構である。直角に折れることから、竪穴住居の壁溝と判断した。溝の中には小ビットが並ぶ。上屋に関係するものか。

### SC015 (Fig44)

SC012の北側で検出した。012同様住居の壁溝だろう。北側部分は溝が二重に並ぶ。

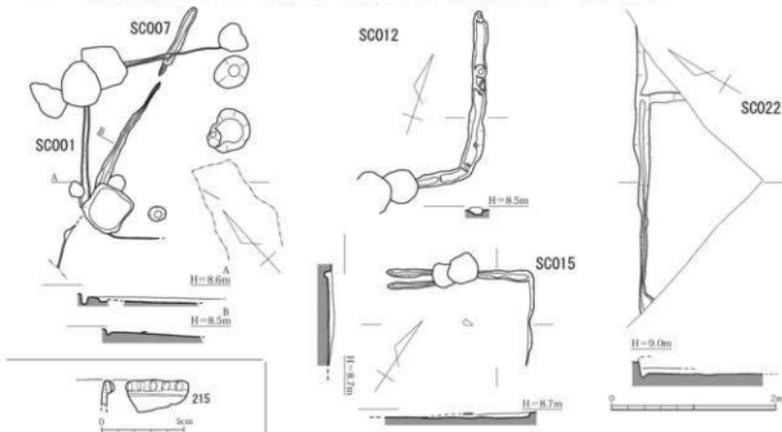


Fig44 SC001・007・012・015・022 実測図 (1/60) 及びSC007 出土遺物実測図 (1/3)

#### SC022 (Fig44)

調査区南東端部で検出した。北側の一部を検出しており、南側は調査区外に延びる。東側にはベッド状遺構を有する。出土遺物には弥生土器の小片等が出土したが図示し得るものはない。

#### SC019・020 (Fig45)

調査区南東部で検出した。SK008、SD016、SK030に切られる。検出時に2棟が重複しており、SC020がSC019を切ると考えられる。当初は逆の切り合いを想定していたが、掘削の経過に伴う検討等の結果上記の判断に至った。上記の通り、複数の遺構と複雑に切り合っており、特に遺物の取り上げには困難を極めた。SC019出土遺物については、極力020と重複しない範囲での遺物の採取に務めたが、混入は少なくないものと思われる。

020は東西に長い長方形を呈しており、東西の両端にベッド状遺構がつく。ベッドは地山削出しによる。住居南壁際のほぼ中央に屋内土坑を有する。床面付近には焼土が堆積しており、炭化した建築部材も確認している。焼失住居であろう。なお、住居西側壁面の壁溝内には、住居の壁と考えられる薄い木質が残存していた。以下に図示した遺物等から古墳時代前期の住居と考えられる。

019は4本柱の住居である。各柱間の距離は約200cmを測る。図示した遺物は2点であるが、上記の理由から時期の特定はできない。020との切り合い完形から古墳時代前期を下限とすると考えられるが、両遺構の掘削時弥生時代中期後半後半に比定される遺物が一定数出土していたことから、やや時期幅をもたせ弥生時代中期後半～古墳時代前期の遺構とする。

#### 出土遺物 (Fig45)

216・217はSC019出土遺物として取り上げた遺物である。216は高坏である。口縁～裾部上半が残存する。坏部はやや深く、丸みをもち、口縁端部でわずかに外反する。217は滑石性の石製品である。紡錘車か。218～225は020出土遺物である。218～220は甕である。いずれも口縁～胴部が残る。221は黒曜石の剥片である。222は石製穂積具である。223は不明石製品である。224は碧玉製の管玉である。225は小型の勾玉である。翡翠製か。

#### SC028 (Fig46)

調査区南東部で検出した。SK008、SD016等に切られる。これらと同じく本遺構を切るSC020とは平行する。出土遺物は極めて少なく、時期は不明だが、020と近い時期か。

#### SC033 (Fig46)

調査区の北端で検出した。確認し得たのは南側の一部で、北側は調査区外に延びる。壁面に沿って壁溝が巡る。西側壁面際は壁溝状の溝が重なる。床面で焼土を確認しており、焼失住居と考えられる。以下の出土遺物から古墳時代前期の住居だろう。

#### 出土遺物 (Fig46)

226は脚付の鉢である。体部下半に暗文状の縦のミガキが残る。227は小型丸底壺か。摩滅により調整不明瞭。228は砥石。229～232は黒曜石製の石器である。229は石錐。230～232は剥片である。233は石製穂積具である。

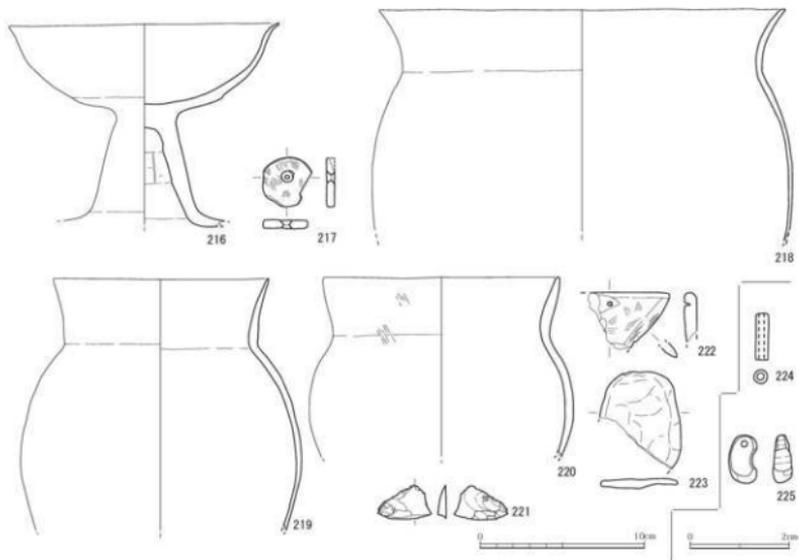
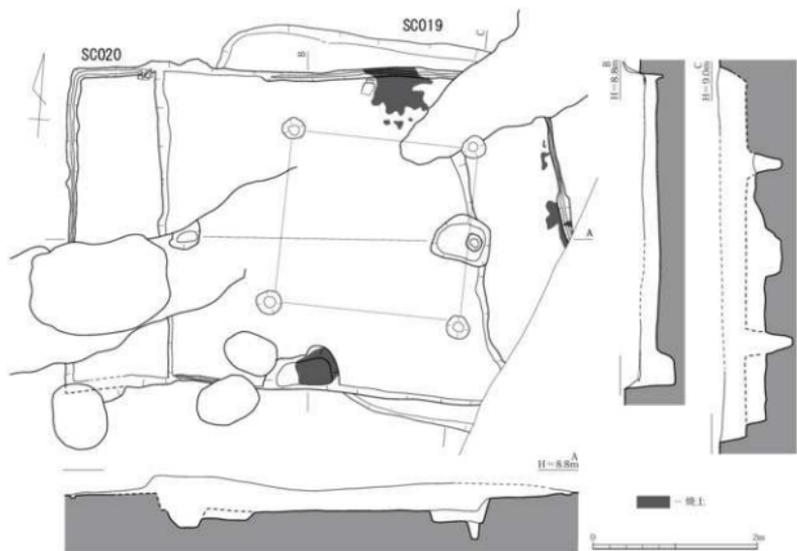


Fig45 SC019・020 実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/3・1/1)

#### SC37・38 (Fig46)

調査区中央北寄りの西側壁面際で検出した。同一地点で切り合っており、西側は調査区外に延びる。SC037は東側の壁溝、及び貼床のみを検出し、貼床除去時にSC038を確認した。038の床面には南側の壁溝に平行する浅い溝が2条残る。両者は浅く、北側の溝は短い。間仕切りもしくは「根太」の痕跡か。出土遺物はいずれも小片で、図化し得るものはない。弥生時代のと考えられる土器片が多いが、混入資料も多く、時期は不明。

#### SC044 (Fig46)

調査区中央西側壁際で検出した。西側は調査区外に延びる。東側にベッドを有する。床面付近から焼土及び炭化した建築部材が出土しており、焼失したものと考えられる。完形のもの少ないが、遺構内からは複数の土器が出土した。以下の出土遺物から古墳時代初頭～前期の住居か。

#### 出土遺物 (Fig47)

234～237は甕である。長胴で、頭部で緩やかに屈曲する。内外面ともにハケ仕上げ。234には尖底、237は小さな平坦面をもつレンズ底の底部がつく。238は丸底壺である。239・240の甕は、取り上げ番号を付して住居出土遺物として取り上げたが、外面の粗いハケや内面の削りから、後の時期に属するものか。本遺構付近は、他の遺構が密集して包含層状を呈しており、全体を下げながら遺構検出を行った経緯があり、上位で検出できなかった後世の遺構に伴う遺物が残存することも十分考えられる。

#### SC045 (Fig48)

調査区中央で検出した。確認し得たのは、壁溝の一部のみである。溝内からは小ピットを1基検出した。住居床面と考えられる部分から弥生土器が出土したが、胴部で図化し得ない。

#### SC046 (Fig48)

調査区中央やや南寄りで検出した。残るのは壁溝の一部のみである。覆土からは弥生土器小片等が出土したが、詳細な時期は不明。

#### SC048 (Fig48)

調査区中央南寄りで検出した。小型の堅穴住居である。表土掘削時のミスで、東側及び南側の壁溝を検出出来なかった。また、精査が不十分なまま掘削を行ったため、後述するように、後代の遺物の混入等がある。遺構の時期は床面直上の土器から古墳時代前期を前後する時期の住居と考えられる。

#### 出土遺物 (Fig49)

241は長胴の甕である。242・243は小型器台である。242は床面直上から出土した。244は混入と考えられる高環である。住居検出時に完形で出土したため、遺構内に図化したか、出土レベルが高く、検討の結果、混入と判断した。

#### SC051・052 (Fig48)

中央区南側西側壁面際で検出した。いずれも一部の検出で西側は調査区外に延びる。C051がSC052を切る。051壁面上で完形の須恵器環が出土した。また、052は覆土中からほぼ完形の弥生土器の小

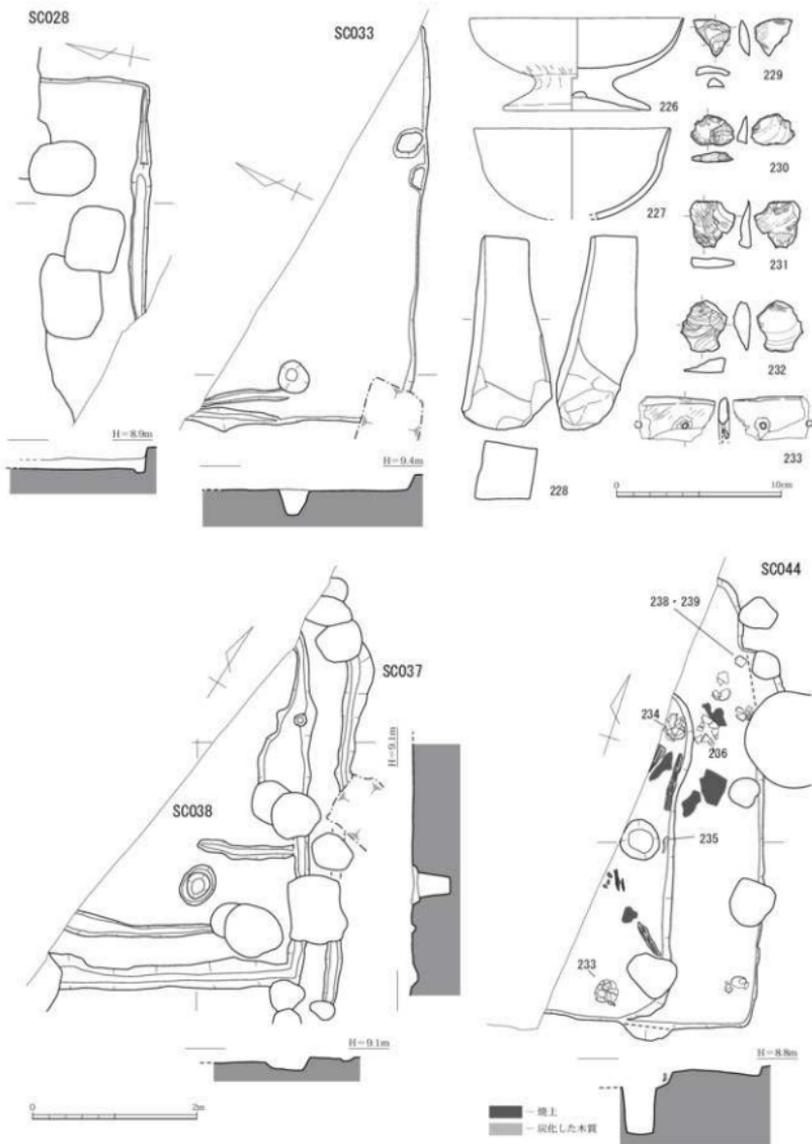


Fig46 SC028・033・037・038・044実測図(1/60)及びSC033出土遺物実測図(1/3)

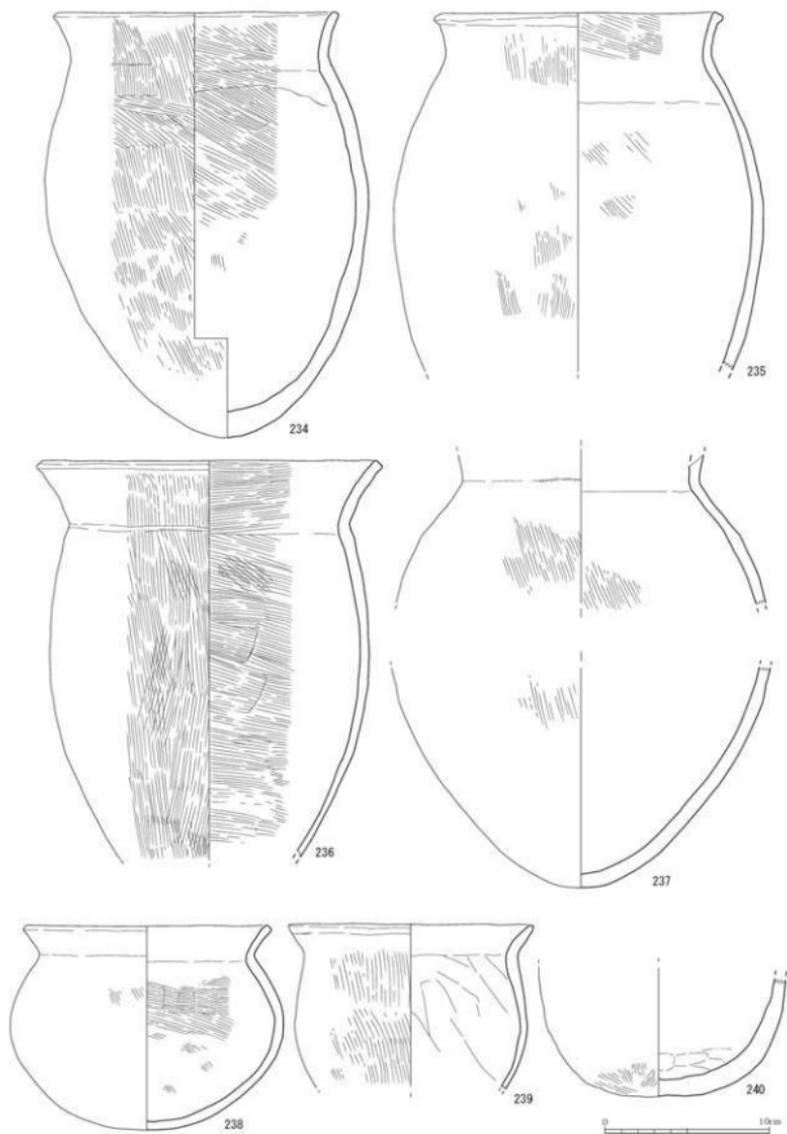


Fig47 SC044 出土遺物実測図 (1/3)

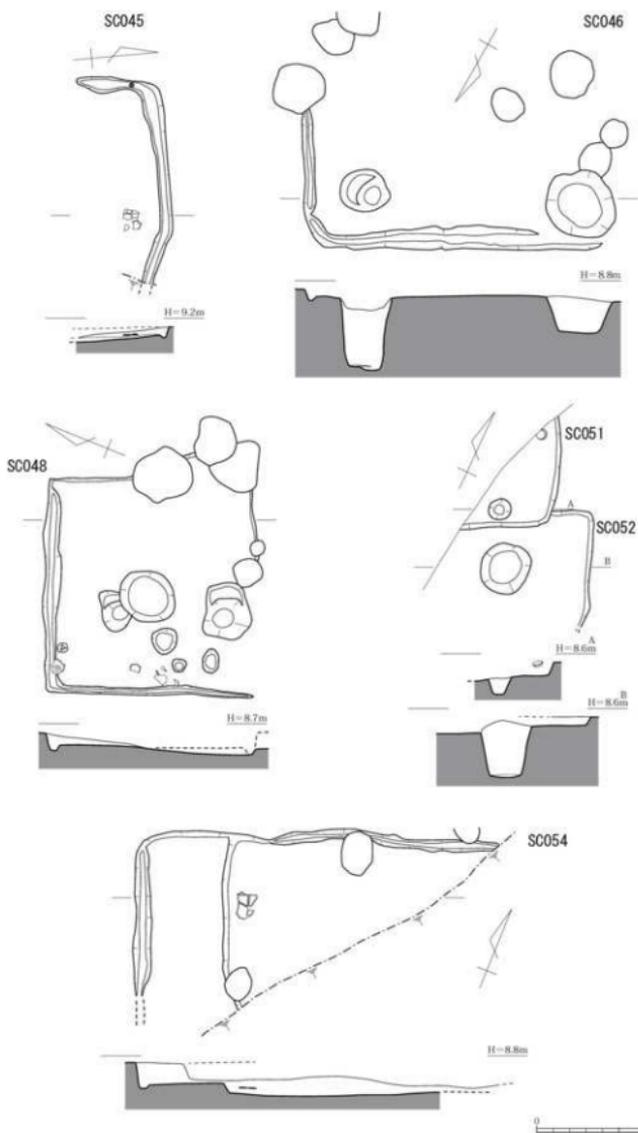


Fig48 SC045・046・048・051・054実測図 (1/60)

型の坏が出土した。051は7世紀初頭前後、052は弥生時代後期以降とする。

#### 出土遺物 (Fig49)

245・246はSC051出土須恵器である。245は坏である。底部にヘラ記号を有する。246は坏身である。247はSC052出土の弥生土器の小型の坏である。底部は、ややレンズ状に丸みをもつ。

#### SC054 (Fig48)

調査区中央やや南寄りで検出した。東半を攪乱に切られる。残存部でベッド状遺構を検出した。以下の出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代前期の住居とする。

#### 出土遺物 (Fig49)

248は壺の胴部片である。頸部に突帯が巡る。249は土製品。平面楕円形で、断面は円形を呈する。

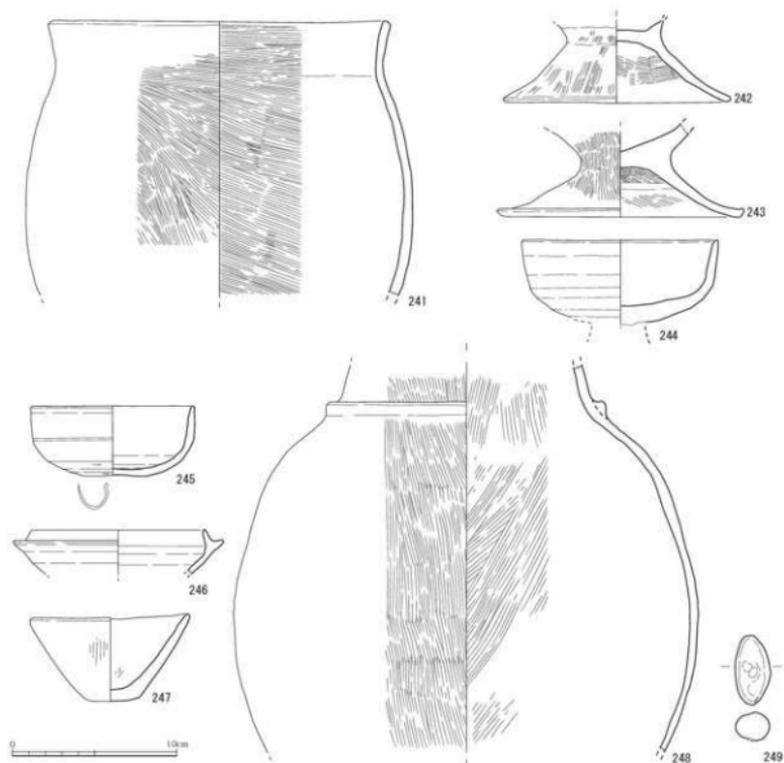


Fig49 SC0048・051・052・054 出土遺物実測図 (1/3)

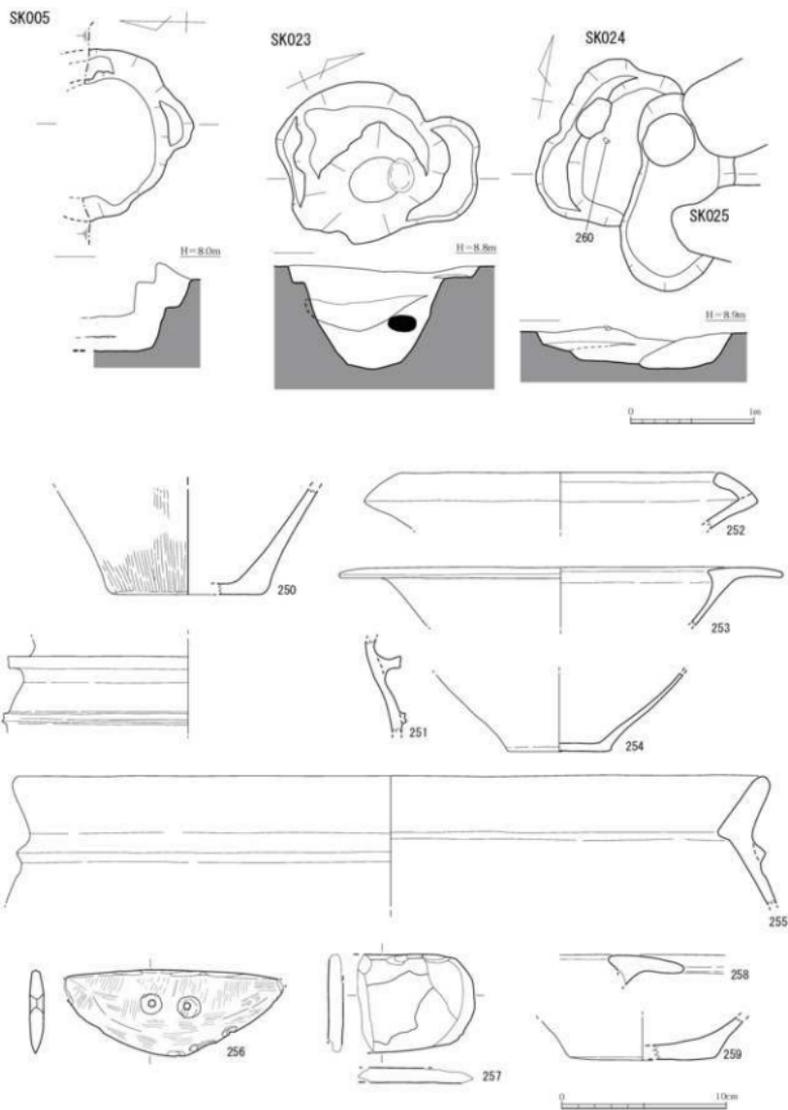


Fig50 SK005・023・024・025 実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

## 土坑

本時期に属する土坑は4基検出した。うち1基からは小銅鐸が出土した。

### SK005 (Fig50)

調査区南側で検出した。遺構の北側は攪乱によって切られる。出土遺物が少ないため、やや時期幅をもたせ弥生時代中期後半～後期前半とする。

### 出土遺物 (Fig50)

250は甕の底部片である。底部と体部の境はやや丸みをもつ。

### SK023 (Fig50)

調査区南東部で検出した。覆土から円礫が出土している。弥生時代中期末～後期初頭か。

### 出土遺物 (Fig50)

251～254は壺である。251は瓢形壺の胴部片。252は複合口縁壺の口縁片。やや新相を示す。253は広口壺の口縁片。254は底部である。255は大型甕の口縁片である。256は石製徳積具である。257は薄い板状の石製品である。

### SK024・025 (Fig50)

調査区南側で検出した同位置で切り合う土坑である。SK025がSK024を切る。024の上層からは図化した小銅鐸が出土した。いずれも出土遺物は少ないが、025は弥生時代後期、024は弥生時代中期後半～後期の遺構か。

### 出土遺物 (Fig50・51)

258は024から出土した甕の口縁片である。259は底部片。甕か。ややレンズ状を呈する。260は小銅鐸である。鈕及び舞を欠損しており、残存する舌が上方へ飛び出す。残存部の長さは5cmを測り、身の横断面は円形に近い。身の中央には孔のような痕跡が残る。土の除去ができなかったため、詳細は不明だが、型持孔か。



Fig51 SK024 出土銅鐸実測図 (1/3)



Ph4 SK024 出土銅鐸

## ビット

以下に本時期の特徴的なビットを報告する。

### SP0058 及び出土遺物 (Fig52)

調査区南東部で検出したビットである。覆土中から図示した青銅製鋤先が出土した。鋤先は弥生土器の甕の胴部片上に重なった形で出土した。

261 は青銅製鋤先である。中には木質が残存する。先端付近を中心に擦過状の使用痕跡が残る。

### SP0106 出土遺物 (Fig52)

調査区南東側で検出した。覆土中から複数の滑石性白玉がまとめて出土した。

262 は石斧の未成品か。側面を中心に叩打痕が多く残る。263～279 は滑石性白玉である。

## 3) その他の遺構と遺物

### その他の遺構 (Fig53・54)

本調査地点からは、出土遺物が極めて少ない等の理由から、時期の特定が出来なかった遺構が少なくない。遺構の主軸から凡その想定はできるものもあるが、確実ではないためここで報告する。紙幅の都合から、個々の遺構の詳細については割愛する。

掘立柱建物については、SB006 の他 6 棟を復元した。本調査地点からは大小のビットを多く確認しているが、調査中に確認し得たのは、SB006 のみで、ここで挙げるものは整理時の検討の結果、建物としたものである。調査後に遺構としてまとめたため、連番で SB57～SB62 の番号を付した。復元にあたっては、各時期の住居や溝等遺構の軸の傾向が分かるものを参考にした。

溝は、報告したものの他、5 条を検出 (SD34・35・36・50・56)。050 は南北方向に延びるが、その他は、弥生時代終末期～古墳時代前期に位置づけられる竪穴住居等とほぼ同じ軸をもつ。土坑は、報告したものの他 4 基を確認している (SK26・39・40・41)。

### その他の出土遺物 (Fig55)

ここで挙げる出土遺物は、遺構検出や混入資料、及びビット出土遺物である。280 はビット出土の須恵器皿である。器高は浅く、底部には成形時のものかへら状工具の痕跡が残る。281 はビット出土

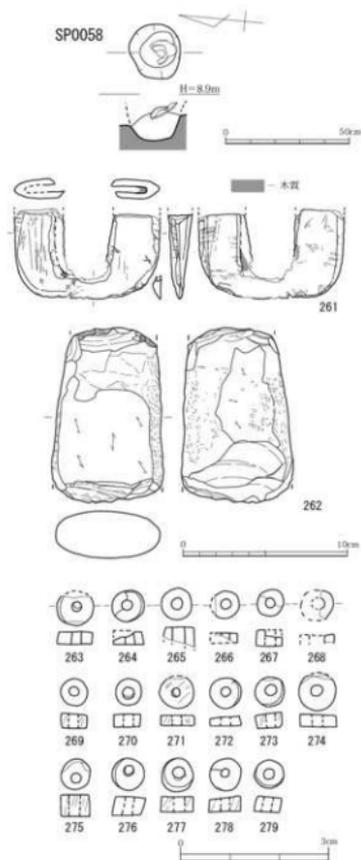


Fig52 SP0058 実測図 (1/20) 及び  
SP0058・0106 出土遺物実測図 (1/3・1/1)

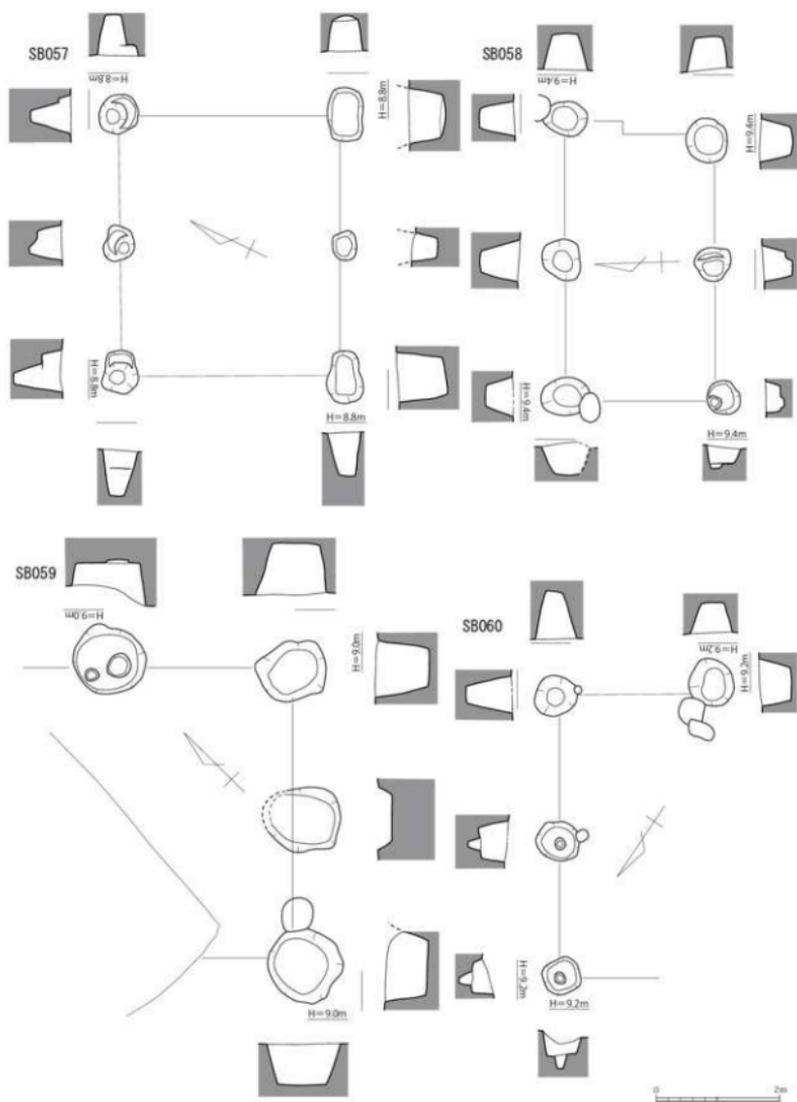


Fig53 その他の遺構実測図1 (1/80)

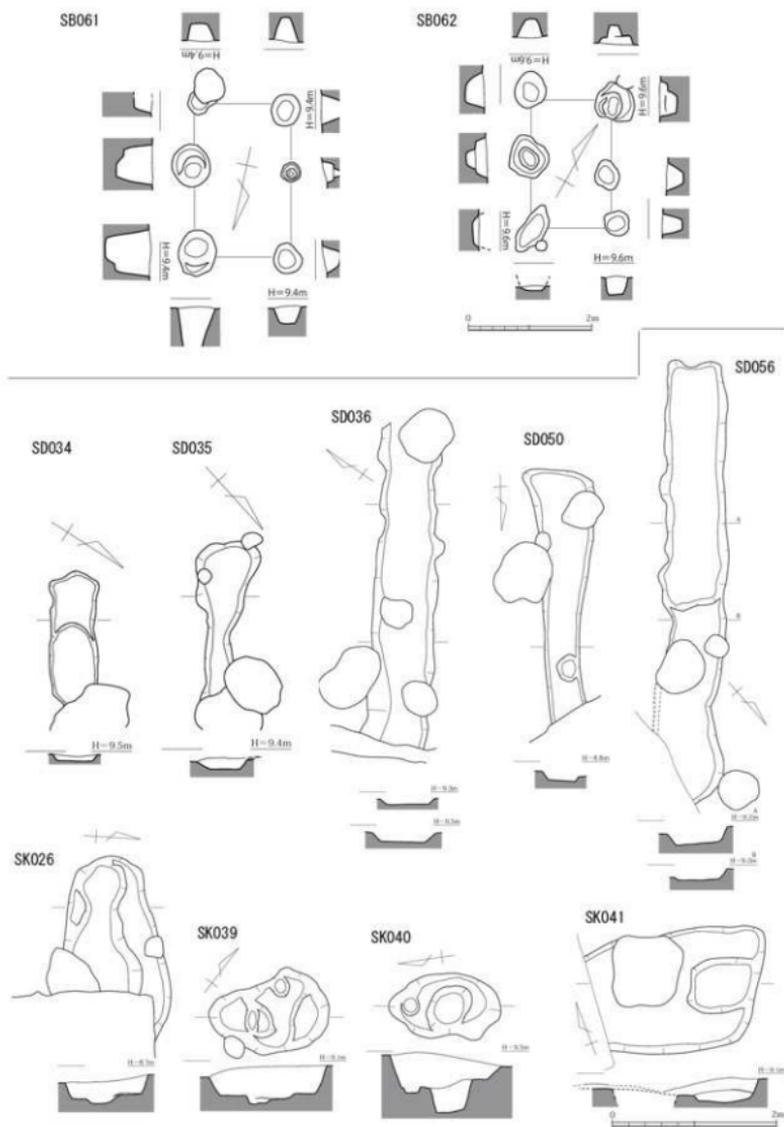


Fig54 その他の遺構実測図2 (1/80・1/60)

の須恵器の坏蓋である。282 はピット出土の須恵器坏身である。283 は遺構検出時出土の須恵器の高台付坏である。284 はピットから出土した土師器の甕である。胴部に約 5 cm の孔を有する。285 はピット出土の土師器の坏である。286 はピット出土の弥生時代後期の複合口縁壺である。長胴で口縁端部は上方に立ち上がり、やや短い。頸部にはやや丸みをもつ突帯が巡る。内外面ハケ仕上げである。287 はピット出土の瓢形壺の胴部片である。288 は遺構検出時出土の弥生土器の蓋である。289 は甕である。弥生時代終末期～古墳時代前期に位置づけられるか。底部はわずかにレンズ状を呈する丸底である。口縁端部は丁寧なヨコナデにより面取りされる。290 は遺構検出時に出土した甕である。長胴で、頸部の屈曲は緩く口縁は上方に立ち上がる。全体的に器壁は薄い。内外面ハケ仕上げである。291 は時期不明の SD056 から出土した。土製の紡錘車か。断面は台形だが、やや丸みをもつ。292 は遺構検出時に出土した石製穂積具である。293 は遺構検出時に出土した黒曜石製の石織である。294 は SB006 の柱穴である SP024 から出土した黒曜石製の石織である。295 はピット出土の不明滑石製品である。孔を有する。

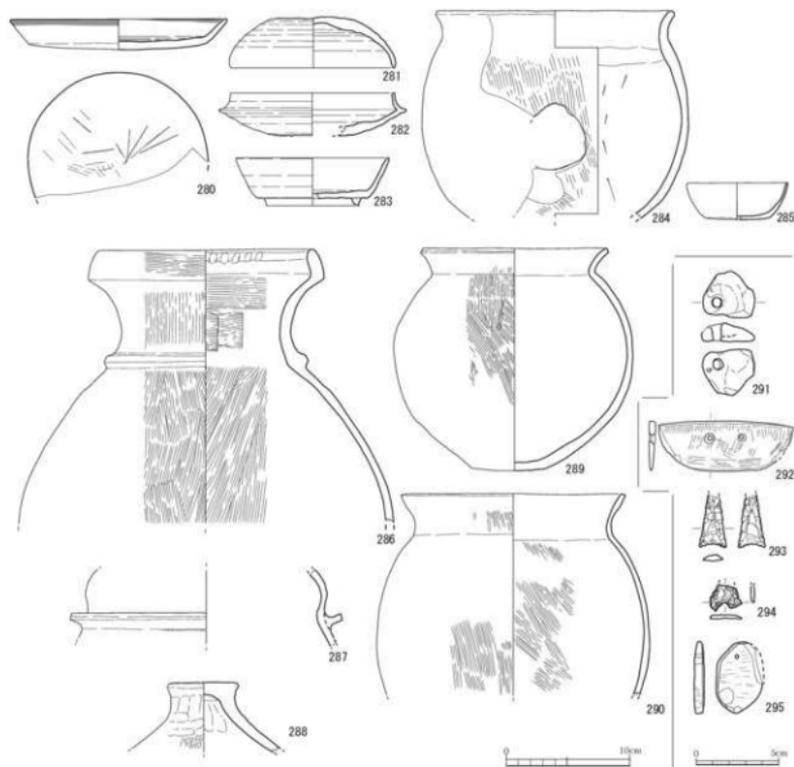


Fig55 その他の遺物実測図 (1/4・1/3)

### III 小結

最後に、本調査成果をまとめる。出土遺物のうち最も古いものに SC007 出土の夜白式土器がある。本資料は混入であるが、遺跡内では当該期の遺構のまとまりが3地点で確認され、うち一カ所は本調査地点南側一帯であることから、上記の遺物は周辺における人跡を裏付けるものといえよう。

本調査地点では、時期が特定できなかつた遺構も少なくないが、出土遺物もあわせて考えると、本格的な遺構の増加は、弥生時代中期後半前後と考えられる。以降、古墳時代前期にかけて、盛期を迎えたことが、竪穴住居の検出数や同一地点での建替え等から推測できる。この傾向は、遺跡全体の集落動態と軌を一にしている。上記の住居のうち、古墳時代前期を前後する時期に属する SC020・033・044 の3棟については、廃絶時に焼失している。SC044 の遺物出土状況を見る限り、廃絶後の土器投棄ではなく住居内に土器がある状態で焼失している。焼失住居は同時期の比恵遺跡群でも確認されており、一定範囲に及ぶ同時期の住居焼失の背景については、今後、十分に検討する必要がある。弥生時代中期後半以降、住居とともに急増する井戸は1基検出した。位置は台地の西側縁辺部で、周辺の確認調査から以西には河川堆積が広がると考えられ、水の取得が比較的容易な場所に造営されていることになる。すでに指摘されているような過度な人口集中や都市化に起因する河川環境の悪化を示すものか。仮に、この視点に依拠すると、河川を含む自然環境を代償として得た利器の一つとして挙げられるのは青銅製品であろう。本調査地点からは小銅鐸と青銅製の鋤先が出土している。

那珂遺跡群では古墳時代前後半以降、集落が衰退し、次に遺構が増加するのは東光寺剣塚古墳が造営される6世紀中頃以降である。古墳造営をきっかけとして、集落の再編成が行われたものと考えられているが、本調査成果も全体の集落動態と符合しており、当該期の溝や土坑等を検出している。特筆すべきは、初期瓦が多量に出土した SK008・011 である。複数の軒丸瓦も出土しており、大半がこれまでに出土例がないもので、バリエーションに富む。初期瓦はこれまでの研究成果から6世紀末～7世紀中頃の所産とされているが、SK008 で瓦と共存する須恵器から廃棄の時期は8世紀以降と考えられる。瓦は葺き替え可能なものであるが、最も古いとされる神ノ前タイプの瓦を例にとると、生産から廃棄までに100年以上経過したことになる。葺き替えを前提に推察すると、瓦は那珂遺跡群で独占的に受容されているものの、瓦陶兼業体制のもと生産された初期瓦は貴重なものとして再利用され、最終的に異なる時期の瓦が一括して廃棄されたことなどが考えられよう。瓦の廃棄にあたっては、整った方形の堀方が伴うと考えられ、出土した瓦の分布から箱のような外枠の存在も想定される。初期瓦が葺かれた建物は、これまで推定されてきたように、本調査地点周辺で確認されている倉庫や長舎建物であろうことは想像に難くない(18次・23次・56次・114次・117次)。本調査地点で検出した総柱建物 SB006 にも葺かれていた可能性も十分あり、本建物の柱穴堀方には複数の瓦が混入しているところを見ると、建物造営時には周囲に瓦があったことは間違いない。なお、SK008・011 と SB006 はいずれも南北を指向しており、少なからず因果関係があるものと考えられる。

既往の研究を鑑みると、本調査成果は、文献資料にありつつ、その所在について推察はされているものの、未だ詳細が不詳である「磐瀬行宮」や「筑紫大郡」等の解明への糸口になることも予想され、那津官家設置から大宰府成立にいたるまでの博多湾沿岸をめぐる検討、延いては、当時の東アジアをめぐる諸研究に対して重要な課題を提起するものと考えられる。

その後の平安時代に属する遺構として SE002 や SD042 を検出しているが、これらの遺構からは越州窯系青磁、邢窯系白磁、風字硯等が出土している。これらは大宰府も含めて考える必要があるもので、上記の瓦や遺構群同様、地域史にとどまらず日本史的な視点で検討すべき重要な成果であろう。



調査第1区全景（北から）



調査第2区全景（北西から）



調査第3区北側全景（西から）



調査第3区南側全景（北西から）



SE002 土層（南から）



SE031 遺物出土状況（南から）

PL2



SD003 遺物出土状況（北から）



SD016 遺物出土状況（南西から）



SC019・020 完掘状況（西から）



SC033（北東から）



SC037・038 完掘状況（南西から）



SC044 遺物出土状況（北から）

## 報告書抄録

ふりがな	なか87							
書名	那珂87							
副書名	那珂遺跡群第182次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1474集							
編著者名	中尾祐太							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	令和5年3月23日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				m <sup>2</sup>	
那珂遺跡群第182次	福岡市博多区竹下四丁目108番、110番、99番の一部、那珂一丁目700番	40132	0085	33.34.15	130.25.59	2020.4.20 ～ 2020.9.30	1,410 m <sup>2</sup>	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
那珂遺跡群	集落跡	弥生時代、古墳時代、古代	井戸、溝、堅穴住居、船立柱建物、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦石器、青銅器				
要約	<p>本調査地点は、遺跡中央西端部の台地際に位置する。調査対象地内には現代の開発に伴う、擾乱が多いものの、弥生時代中期～古墳時代前期及び古代に属する遺構・遺物を比較的良好な状態で検出した。</p> <p>特筆すべきは、古代の土坑SK008・011で、両者からは「初期瓦」が多量に出土した。状況から一括廃棄遺構と考えられ、ヴァリエーション豊かな軒丸瓦も出土している。那珂遺跡群の一部はこれら初期瓦を独占的に所有しており、兼ねてよりその性格が検討されてきた。本成果は、瓦研究はもちろぬ。周辺地域もふくめた古代集落研究等に大きく寄与するものと考えられる。</p> <p>また、弥生時代の遺構からは市内9例目となる小銅鐸が出土し、10世紀前後と考えられる井戸からは那珂系白磁碗が出土した。これらは本調査地点や遺跡の重要性を顕著に示すものといえよう。</p>							

---

## 那珂 87

那珂遺跡群第 182 次調査報告  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1474 集

2023 年（令和 5 年）3 月 23 日

発行 福岡市教育委員  
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 松古堂印刷株式会社  
福岡市西区隈船寺 2 丁目 28 番 1 号

---